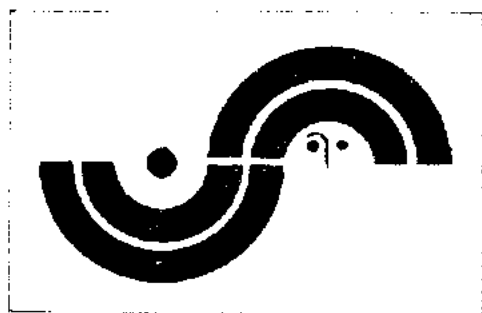


第22回全国婦人会議

日 本 を 考 え る

- 物 と 心 -



労働省婦人少年局

第22回全国婦人会議

日 本 を 考 え る

— 物 と 心 —

労働省婦人少年局

は し が き

労働省では第26回婦人週間の主要行事の一つとして、北海道及び札幌市との共催で、4月15・16日の両日、札幌市において、第22回全国婦人会議を開催しました。

地元北海道、札幌市ならびに民間の婦人団体の方々の多大のご協力を得て開催されたこの会議には、地元はもとより全国各地からも多数の傍聴者が参加され、盛会裡に終了しました。

これは、2日間にわたる会議の概要を集録したものです。婦人問題に関心のある方々のご参考に供します。

なお、婦人少年室が、地方において主催、共催、または後援した婦人週間行事の概要も付記しました。

昭和49年6月

労働省婦人少年局

目 次

はしがき

I 婦人週間と全国婦人会議	1
II 第22回全国婦人会議開催要領	2
III 会議の概要	5
☆ 記念講演	5

「人づくり」

北海道大学長

丹羽 貴知蔵

全国婦人会議選考委員長

☆ シンポジウム	14
----------------	----

「物と心を考える」

講 師 茅 陽 一

見 田 宗 介

人 見 康 子

大久保 貞 義

司 会 三 枝 佐枝子

☆ 分科会	48
第1分科会	48
第2分科会	52
第3分科会	55
第4分科会	59
☆ 特別講演	63

「生きることの意味」

画 家 岡 本 太 郎

I 婦人週間と全国婦人会議

労働省では、昭和24年以来、毎年4月10日から16日までの1週間を「婦人週間」と定め、婦人の地位向上のための啓発活動を行ってきました。これは、昭和21年4月10日の第22回衆議院議院総選挙において、日本の歴史上はじめて婦人が投票を行なったことを記念して設定したものです。

婦人週間の実施にあたっては、その時々¹の婦人の問題をテーマとして運動をすすめていますが、本年は、下記のテーマを設けるとともに、とくに今日的課題を提記して実施しました。

日 本 を 考 え る

－ これからの社会と女性の役わり －

課 題 「 物 と 心 」

婦人が、日本社会の今日的諸問題（たとえば資源・環境・物価・レジャー・情報・人間疎外・社会福祉など）を正しく認識し、この変動のはげしい今日の社会における婦人の役わりを考えるという趣旨でこのテーマが設定されたものですが、とくに、婦人が、日本人の考え方、生活様式、慣習等生活のしかたをふりかえり、物と心の調和の問題を深く考え、人間性豊かな社会の形成に参加することを強調しました。

この婦人週間の主要行事として、全国婦人会議を開催しておりますが、43年まではNHKとの共催により東京で、その後は各地方の入びとが直接会議に参加する機会をもちたいという希望もあって地方都市で開催してきました。さらに昨年からは、地方自治体との共催により開かれ、今年は、北海道及び札幌市との共催により、札幌市において開催されました。

会議は、従来からテーマに関する所感文の公募によって全国から選ばれた会議員を中心にすすめられ、組織や団体、地域代表などの立場に規制されない自由な個人としての立場で参加した婦人が、それぞれの体験や意見を交換しあう場として、また婦人のなまの声を社会一般に知らせるという役わりも果してきました。

今年も、週間のテーマにそった所感文を公募したところ、3,592名の応募があり、中央に設けられた選考委員会において別記60名の会議員が選ばれました。さらに、本年は、特に地元北海道から特別会議員として推せんされた8名の男性も参加しました。

会議の第1日目は開会式・シンポジウム・分科会、第2日目は分科会・総会が行なわれ、2日間にわたる傍聴者は約4000名でした。

Ⅱ 第22回全国婦人会議開催要領

1 主 題 日 本 を 考 え る

— 物 と 心 —

2 主 催 労働省・北海道・札幌市

3 後 援 日本放送協会

4 協 賛 文部省・厚生省・農林省

5 期 日 昭和49年4月15・16日

6 場 所 北海道札幌市

会場 北海道厚生年金会館

7 会 議 員 全国の応募者から選定された60名と、地元北海道から推せんされた特別会議員8名

8 会議の構成 シンポジウム・分科会・総会

○ 分 科 会 次の四つの分科会に分かれ、17名の会議員で構成

第1分科会 資源と生活の問題を中心として

リーダー 東京大学助教授 茅 陽 一

第2分科会 文明と生活の問題を中心として

リーダー 東京大学助教授 見 田 宗 介

第3分科会 人間関係を中心として

リーダー 慶応義塾大学教授 人 見 康 子

第4分科会 自由時間の問題を中心として

リーダー 独協大学助教授 大久保 貞 義

9 選考委員会の構成

委員長 北海道大学長 丹 羽 貴知蔵

委 員 前記分科会リーダー 4 名

事務局側委員 労働省婦人少年局長 高 橋 展 子

10 会 議 員

(第1分科会)

布 蒲 万 代 (北海道) 山 本 和 子 (静 岡)

谷 貴 子 (北海道) 小 林 英 (三 重)

三宅 嘉子 (北海道)	佐々木 典子 (山口)	特別会議員
星 翠子 (岩手)	二宮 敏子 (愛媛)	
高橋 美千代 (山形)	遠藤 清 (北海道)	
萩原 時子 (福島)	福岡 謙次 (北海道)	
市川 三千代 (埼玉)	木村 秀忠 (北海道)	
豊島 美代子 (福井)	沢村 重一 (北海道)	
大沢 裕子 (岐阜)		

(第2分科会)

福沢 米子 (北海道)	矢萩 はる (和歌山)
山田 よしえ (北海道)	長谷川 久子 (鳥取)
佐藤 綾 (北海道)	田口 田鶴子 (岡山)
斉藤 紀子 (北海道)	筒井 和代 (香川)
藤平 局子 (栃木)	音丸 幸子 (長崎)
田中 胖子 (神奈川)	川辺 祥子 (宮崎)
染谷 文子 (大阪)	原口 花子 (鹿児島)
内村 雅代 (兵庫)	中村 田恵子 (沖縄)
中川 睦子 (奈良)	

(第3分科会)

石田 漱 (北海道)	坂本 昭世 (長野)	特別会議員
村岡 朗子 (北海道)	元村 トミ子 (福岡)	
杉野目 康子 (北海道)	吉田 まゆみ (佐賀)	
良原 せつ (青森)	中島 トシ子 (熊本)	
大井 京子 (秋田)	谷岡 裕 (北海道)	
竹田 倫子 (東京)	山内 俊雄 (北海道)	
工藤 イヨ (新潟)	佐々木 昭一 (北海道)	
湯口 昌子 (富山)	工藤 欣弥 (北海道)	
館農 稔子 (石川)		

(第4分科会)

滝野沢 信子 (北海道)	墨 優子 (愛知)
橋本 裕子 (北海道)	田口 きぬ子 (滋賀)
佐藤 惇子 (北海道)	国又 玲子 (京都)

香 田 八重子 (北海道)	井 上 直 子 (島 根)
若 生 歌 子 (宮 城)	吉 川 五百枝 (広 島)
菊 地 清 子 (茨 城)	坂 野 陽 子 (徳 島)
唐 笠 真 琴 (群 馬)	上 野 芳 子 (高 知)
久保村 千 枝 (千 葉)	川 野 聡 子 (大 分)
小 田 多 恵 (山 梨)	

11 会議プログラム

(4月14日)

○開会式

合唱「世界の花」

開会のことば	労働省婦人少年局長	高 橋 展 子
あいさつ	労 働 大 臣	長谷川 峻
	北 海 道 知 事	堂垣内 尚 弘
	札 幌 市 長	板 垣 武 四
歓迎のことば	第22回全国婦人会議 実 行 委 員 長	佐 藤 柳 子
選考委員長・分科会リーダー・司会者紹介		

記 念 講 演	北 海 道 大 学 長 (全国婦人会議選考委員長)	丹 羽 貴知蔵
---------	------------------------------	---------

○シンポジウム

「物と心を考える」	講師	分科会リーダー
	司会	評 論 家 三 枝 佐枝子

○分科会

(4月16日)

○分科会

○総 会

あいさつ	北海道労働部長	上 口 国 夫
経 過 報 告	札幌市厚生局青少年部長	寺 島 伸 治
全 体 討 議	司会	評 論 家 三 枝 佐枝子
分 科 会 報 告		
全体での話しあい		
特 別 講 演 「生きることの意味」	画家	岡 本 太 郎
閉会のことば	労働省婦人少年局長	高 橋 展 子

Ⅲ 会 議 の 概 要

☆ 記 念 講 演

「 人 づ く り 」

北 海 道 大 学 長 丹 羽 貴 知 蔵
全国婦人会議選考委員長

このたび、労働省が第26回婦人週間のテーマといたしまして、昨年に引き続き「日本を考える」という問題を取り上げられ、本年は特に「物と心」の問題を本質的に見直すということを課題として提示され、これからの社会における女性の役割りを追求する運動を展開されましたことは、まことに時宜を得たものと心から賛意を表する次第でございます。

ところで、この意義ある御企てに対しまして、私ごとき一介の大学人に記念講演のご依頼をいただきました。そのいわれを考えてみたのでございますが、一応私も長年大学におきまして、研究を通じて、人材の養成にあたってある、そういったような立場から何かご婦人方に「ものを申せ」というようなご命令ではなからうかと、おこがましくも出てまいった次第でございます。

I 大学のあり方

そこで、大学人という立場でございますので、ここ数年来の実情から、私の感じております大学のあり方ということから申し上げてみたいと存じます。

昭和44年から45年にかけて、私の属しております北海道大学におきましてもいわゆる大学紛争に巻き込まれ、その激しさは東京大学に次ぐものといわれておったのでございます。この紛争の傷のいまだ癒えやらぬ昭和46年の春に、私は学長を仰せつかったのでございます。3年前のことでございますが、就任当時、北大の教職員の皆さま方に申し上げたことがございます。それは、「申すまでもなく大学は人づくりの場でございます。これは、まず環境をよくすることから始まるので、それがためには学内自然環境の整備と、精神的な環境の改善に努力してまいらなければなりません」と。

このような北大の環境整備計画につきまして、早速政府にその予算措置を要求してまいったのでございますが、政府の完全なご理解をちようだいいたしまして、大学の構内交通計画とか、緑化計画、あるいは文化財保護計画とか、あるいは基幹設備の整備計画などが、年次計画をもって着実に進行中でございます。

また、公害の原因となります大学内の各研究室からの種々雑多な化学薬品を含む有害廃液の処理施

設も完成いたしました。これらの教育環境の整備の進行と相まって、大学の使命を強調してまいりました。その方針が次第に軌道にのってまいりまして、学内の精神的環境もここ1~2年来特によくなってまいったのでございます。

第2は、紛争当時、これが発端であったといわれております教養部の改革でございます。教養部と申しますところは、入学時にまず教育を受ける最初のところでございます。

戦後、新しい教育制度が取り上げられまして当初理想的と称せられておりました制度が、理想とは逆の世の中の推移に災いされまして、20年来の積弊がたまっております。これはどこの総合大学でも共通の悩みを持っておるのでございます。相手は人の問題でございますのでなかなか簡単にはまいりませんけれども、向こう2年間の間には何らかの成果を得ることを期待いたしております。

第3は、大学において、教育を完成するところと申されております大学院の組織的確立ということでございます。

ご承知の方も多からうと存じますが、戦後でございました新制大学院は、それぞれの学部、学科の上に乗せした大学院でございまして、先生方も学部の講座と大学院を兼務しておられます。事務の方々も学部の事務の、まあ大げさに言えば片手間に大学院の事務をとっておられるということでございます。私どもはこれを積み上げ方式の大学院と申してまいりました。

北海道大学におきましては、道にございます北海道自然保護審議会のご要望にこたえまして、環境問題を研究教育する大学院を設置するという考えを、私は学内に披瀝いたしました。12の学部と4つの研究所から推薦されました、自然科学、人文科学、社会科学、各分野の教授たちによって構成される専門委員会を設置いたしまして、1昨年来検討を重ねました結果、北海道大学大学院環境科学研究科という構想がまとまりました。おかげをもちまして本年度調査費がつくということに相なった次第でございます。これは従来の学部、学科、あるいは研究科より独立いたしまして、別個の教官組織、別個の事務組織を持つ、組織的に確立した大学院でございまして、今後の大学院の充実に及ぼす影響はきわめて大きく、その成立が学の内外から、また国際的にも期待されておるところでございます。

ここで、この「北海道大学大学院環境科学研究科」の概要を、本日の課題の物と心の調和ということに關係がございましたので申し上げてみたいと存じます。

皆さんすでにご案内のとおり、人類が有史以来培ってまいりました科学の進歩は、過去四半世紀におきまして地球人を他の天体に運ぶまでの画期的な大発展をもたらしたのであります。

しかしながら、他面におきまして、人類の各種活動の結果、地球表面の汚染が加速度的に進行いたしまして、いまや地球の環境そのものを変えるおそれが生じてまいったのでございます。

皆さんご承知のように、近代自然科学は、自然現象をより単純な形に分析をいたしまして、その分析された小さい部門をそれぞれ綿密に追求するという、実験的手法によって大きな発展を遂げてまい

ったのでございます。それはそれなりに学問の進歩に大いに貢献してまいったのでございますが、このように実験室におきまして、精密な器具や装置の中で単純化された現象を扱うことを重点とするとこれまでの科学は、公害や各種の災害、あるいは有害生物の大発生のような、いろいろな原因が複雑にからみ合う複合的でしかも大規模な現象に対しましては、著しく非力であったといわざるを得ないのでございます。年々発生しております自然災害など、われわれを取り巻く環境におきます複雑な自然現象を、できるだけすみやかに解明いたしますためには、このような自然現象を直接自然の場で対象とするような研究と、そういった研究に携わる人材の養成がどうしても必要でございます。

また一方、今日ほど各種の公害への対策や自然保護の緊急性が要求されておりますときにはないと思われるのでございます。資源開発、エネルギー開発、人口問題、地域開発など、人間のつくり出す環境と自然のかかわり合いを明らかにいたしまして、その根源的な対策を考究いたしますことは、現代の科学者に課せられました焦眉の課題の1つであろうと思われるのでございます。

このような状況に対応いたしますためには、自然科学、人文科学、社会科学の諸分野の研究者が、その垣根を越えて広い視野から相互に協力し合い、問題解決につとめるような研究教育体制がぜひとも必要でございます。

「大学院環境科学研究科」は、以上申し上げましたような観点から、人間のつくり出す環境と自然の調和、自然界と人間社会との調和の仕組みを研究いたしますとともに、現に発生しつつあります各種環境問題の解決に寄与いたしまして、それを通じて人類の福祉の向上に貢献しよう、物と心の調和に貢献しよう、また、そのための人材の養成を目的といたしておるものでございます。

以上、大学のあり方について所見の一部を申させていただきますが、環境という問題が出てまいりましたので、環境問題に関連をいたしまして、公害、エネルギー、資源の問題に触れてみたいと存じます。

II 公 害 問 題

公害問題の解決につきまして、過去20数年来の例を申し上げてみたいと存じます。

昭和27年のころのこととございましたが、瀬戸内海の離れ島にある工場に就職いたしました卒業生を激励いたしますために、その工場をお訪ねしたことがございます。

この工場では、硫化鉍を焙焼して — 空気を通しまして焼くことを焙焼と申しますが — 有用金属を製練し、出てきました排気ガスから硫酸を製造しておりました。硫酸は液体でありますから固定されるのでありますが、それでも1ないし2％程度の濃度の亜硫酸ガスを放出しておりましたために、島の内側の港に面した工場の背景は、文字どおり裸の山となっておりまして、逆に島の外側に面しました反対側は、緑濃い傾斜で、瀬戸内海の絶景を眺めることのできる社宅地帯となっているのとは全く対

態的でございました。

私、工場見学をいたしましたのち、この1ないし2名の薄い亜硫酸ガスでもこれを回収して硫酸にするとともに、明らかに工場に勤める人々とその家族に対し有害となる原因は、取り除くべきではなからうかと意見を述べて帰ったのでございます。

その後、この工場では、先ほど申した薄い亜硫酸ガスを回収する手段を研究されるよう私どもの卒業生にも命ぜられ、数年後このための硫酸工場が別に建設されまして、その結果、亜硫酸ガスの臭気もなくなり、そのころ植えられました苗木が育ちまして、内側の港に面した裸山は今日は転じて緑の山となっておりますということでございます。

これは、公害は克服できるという1つの例でございます。

また、昭和26年ころのことではございましたが、福島県のある工場に卒業生を激励にまいったのでございます。

その工場では、亜鉛を電解製錬によりつくっておりましたが、カドミウムを含んだ有害廃液を放流しておったのでございます。そこで私は工場長さん並びに卒業生に、カドミウムは人体に入れば有害であるが、回収すればすこぶる有用な金属であるから、これを回収する手段を研究したほうがよいのではないかと意見を述べて帰ったのであります。

しかし、カドミウムを回収するようなことをしておったのでは会社の採算がとれないということで、その後も放置しておったのであります。ところがどうでしょう。数年前からカドミウムの公害問題がやかましくなりまして、20年後になってやっと本格的にカドミウムを回収する手段を講ぜられる、ということに相なったのであります。

また、昭和30年5月ころのことではございましたが、連続3週間、イギリス、ドイツ、ベルギー、フランスの4カ国で、ヨーロッパとアメリカの連合の冶金会議が催されまして、当時アメリカのマサチューセッツ工科大学の客員教授をいたしておりました私も、アメリカ人120名とともに参加いたしましたのでございます。

ドイツのデュイスブルグというところにある製錬所を見学いたしました。この工場では、ドイツ国内はもちろん、ヨーロッパ中の各国から産する量で、ドイツに産する量の10倍量の硫酸滓——硫酸滓と申しますのは先ほどの硫化鉄鉱を焙焼し空気を通して焼きまして、亜硫酸ガスは硫酸にする。その焼いて硫黄を飛ばした残りのかすを硫酸滓と申しております。つまりこの鉱石を焼いたかす——硫酸滓をヨーロッパ中から集め、これを製錬いたしまして、主成分である鉄分をはじめ、含有成分である銅、金、銀、コバルトのほかは、今日の「公害」の原因となっております鉛、亜鉛、カドミウム、砒素、アンチモンといったような、金属あるいは非金属でございますが使いようによっては有用となり、放流すれば有害となる含有物をすべて回収しておったのでございます。

その後日本に帰りまして、この事実を関係ある幾つかの工場でお話をいたしましたところ、幹部の方々から非常に注目していただきましていろいろとご検討くださったのでありますが、わが国でこの種の工場1つ1つから排出いたします硫酸の量が、先ほど申し上げましたドイツの1つの工場では処理しております量の10分の1以下であったということで、日本の各工場では、そういうことをやっておったのでは採算がとれないということでそのままになっております。

以上、今日の公害の原因等につきまして、私の体験から2～3の例を申し上げましたが、「公害」金属あるいは非金属、およびそれらの化合物から、人体はもちろん環境に対する害をなくするためには、産業行政をあずかる当局の「全国に点在する諸工場の廃棄物を集めて処理する」、そのための強力な行政指導と、それらの処理手段を総合的に研究する「公害対策に対する総合研究機関」がぜひとも必要でございます。

そういうことが行なわれまして、企業体はその気になって必要なお金をかけるということにいたしますならば、私は、公害をもって公益となす——先ほどの1ないし2%の亜硫酸ガスを回収して有用な硫酸として、そのあと裸山に木を植えて緑の山としたのも1つの例でございます。

あるいはまた、回収したカドミウムを有用なことに使う、そして人間に対する害をなくすということさえ不可能ではないと申し上げたいのでございます。

昨年7月、私は外務大臣より「科学協力に関する日米委員会」の日本側委員というのを仰せつかりまして、ワシントン政府の国務省で行なわれました会議に出席いたしました。そのときにも環境問題が非常に注目を浴びまして、1 環境問題への組織的アプローチの方法の確立。2 環境問題に関する研究及びその成果の情報交換を担当する機関の設置。3 毒性化合物の国際的登録。これは、有害物質が生産され、生産されてから最的に使われる、そういう過程を世界的に登録するということでございます。4 温排水の処理方法の確立。これは今日問題になっております、発電所より出てまいります温排水の処理でございます。これらを今後日米両国が取り上げるべき方向として採択したのでございます。

Ⅲ エネルギー問題

昨年秋以来、急にエネルギー危機が叫ばれるようになってまいりました。わが国の石油生産がまことに貧弱なものであったということは、皆さんすでにご承知のとおりでございます。

ところが、戦後世界に随一と称せられますわが国の造船技術を活用いたしまして、何万トン、何十万トンという大型のタンカーをつくり出し、まことに安い船賃で世界中から石油を運んでくることのできるようになりまして、ここ10年間はそのことに酔っていたのではないかと反省されるのでございます。

しかし、いまからでも遅くはないのでありまして、このエネルギー危機に対処いたしますために、石油のみに頼らないような研究を強力に進める必要があるのでございます。

原子力発電も、とるべき手段を十分に尽くし、かけるべき金を十分にかけるということをいたしますならば、害は十分防げるものでございます。特に昨今の石油価格の高騰に伴い、原子力発電の単価が安くなったという事態となるに至りましては、なおさらのことでございます。

さらに手近かな方策といたしまして、石炭の液化あるいはガス化ということはもちろん実行しなければなりません。北海道にはたくさんまだ石炭が眠っております。また外国にもたくさんある。外国の石炭を、原料炭以外は一原料炭というのは、製鉄に使う原料のことを申しますが、固形石炭のまま日本へ持ってくることはできないという法律になっているのでございます。それをガス化したものを運ぶのはめんどろですが、外国の石炭を液化いたしましてそれをタンカーで持ってくる。あるいは日本の石炭をガス化する、液化する、というようなことをぜひとも実行に移さなければなりません。

それからまた、実現は何年か先のことになるかとは思いますが、公害の伴わない、半恒久的な対策といたしまして、太陽熱及び太陽の光の利用とか、あるいは地熱蒸気による発電とか、あるいは火山の熱を発電に利用するとか、合成天然ガスによる発電、さらには地球の圏内に無尽蔵にあるといわれております水素エネルギーの利用など、早急に開発する研究を進めなければなりません。このような開発研究を積極的に進めますならば、エネルギー問題の将来は決して暗いものではないと私は確信いたしますのでございます。

Ⅳ 資 源 問 題

わが国が、いろいろな資源に乏しい国であるということも、皆さんすでにご案内のとおりでございます。この面に関しまして、わが国は先ほど申しました優秀な造船技術を駆使いたしまして大型船をつくり、世界の各地からまことに安い船賃であらゆる資源を入手する。これを日本独得の生産力にマッチさせて、次々と生活に関する品物を生産いたしまして、ついには『消費は美德なり』といわれるようになったのであります。

ところが、この優秀な生産力も、石油の輸入がとまっては半身不随に近いということに国民全体が気づいたのであります。

石油とても埋蔵量に限りがございます。産油国は、この限りある石油量を、自国の利益のためにできるだけ長く活用すべきだということに昨年来気がついたのであります。石油にかわるエネルギー源は、先ほども申しましたように、われわれの努力次第で見通しは明るいとし上げたいのでありますが、その他の一般資源、平たく申せば生産に必要な原料には、これまた世界中を見渡してもこれとて限りがあるのでございます。むしろ、エネルギー不足よりも資源の枯渇の危うが先にくるのではないかと

いう見方をする方も多くなってまいったのでございます。この点から考えますと、「消費は美徳なり」といったようなことはもってのほかでございまして、本日お集りの皆さんにはものを大切に使用していただきたい。廃物は創意工夫によってできるだけ利用するようにしていただきたいと申し上げたいのでございます。

V 婦人の役割

そこで、ご婦人の役割について申し上げてみたいと思います。以上、大学のあり方、公害問題、エネルギー問題、あるいは資源問題などにつきまして考えるところを申し述べてまいりましたが、その内容から、本日の課題であります「物と心」にどういうふうに結びつくかということを申し上げてみたいのでございます。

環境科学研究科などを考え出しましたのも先ほど申しましたように、結局は物と心の調和につながることでございます。

(1) 資源と生活の問題

第1分科会の、資源と生活の問題。これは資源には限りがあるということでありまして、この限りある資源を有効に利用いたしますためには、何といたしましても、天然にある資源からものを生産する側の方々は、「心のこもった物の造り方」をしていただくように、心のこもったと申しますのは、物さきで言えばその途中の過程におきまして公害物質を出そうが、できた品物が使う方に迷惑をかけようが知らない、というようなことではございませんで、その過程におきまして公害物質を出さないように、品物自体にも使用者にやささかの害もお与えないように心がけていただかなければなりません。

また他方、天然資源そのものをお使いになったり、また工場で作られたものを使用されたりする方々には、「心のこもった使い方」をしていただきたい。大切に使用していただく、しかもできるだけ廃物を生じないように使用していただく、あるいは廃物の有効利用までも考えて使用していただきたい、と申し上げたいのでございます。

(2) 文明と生活の問題

それから、第2分科会の文明と生活の問題。

戦後、物質文明の発達に心を奪われがちであった。しかし、物質文明をいろいろごらんいただいたり、あるいはご利用になりますときに、いつもご自分の考え、ご自分の創意工夫を加えて咀嚼していただいて、あるいは咀嚼された結果をご発表いただくことによって物質文明もだんだん発展してまいると存じます。

最近な例を申し上げて恐縮でございしますが、たとえばわが国の地下鉄でございします。地下鉄は、た

しか昭和の初め、私どもの学生時代に東京の銀座線が最初にできたと思っております。東京の銀座線では、車内では隣の方同士が普通の声では話し合いができないほど騒音がひどかったのでございます。ところが、次に登場いたしました大阪の地下鉄— いま御堂筋線と申しておりますが— この大阪の地下鉄では、隣同士の方が話し合える程度に騒音が緩和されてまいりました。特に、先だつての冬季オリンピックを目ざしてつくられました札幌の地下鉄は、ゴムタイヤ、モノレール式であります。そのため騒音が気にならないくらい改善されております。諸外国からも見学においでになるということでございます。

そういうことから考えましても、現在騒音が問題になっております新幹線や、あるいはジェット機なども、住民の声と関係者の創意工夫によりまして改善されることも、それほど遠いことではないのではないかと期待されるのでございます。

(3) 人間関係の問題

次に、第3分科会の人間関係の問題に触れてみたいと思います。「春風人に接す」という言葉がございますが、お互いに虚心坦懐と申しますか、わだかまりのないフランクな気持で人に接することが大切かと思ひます。自分の信ずることを堂々と人前に披瀝されて、卒直に人からの批判を受け入れるという雅量が必要ではなからうかと存ずるのでございます。

かつて日本人があちこちで排日を受けたということも、自分たちの利益のみを考えて、他人の立場を考えなかったということが原因ではなからうかと存ずるのでございまして、勤勉さを発揮するにいたしましても、思いやりをもって、他人のことを思いやった勤勉さを発揮していただくということが必要であらう。

それからまた、われわれは日本人の1人であると同時に、世界人の1人であるということを十分にお考えいただいて、外国の方々とも自国人と同様な気持で接するという、国際感覚を持っていただきたい。これがまた世界の平和に通ずる道ではなからうかと存ずるのでございます。

(4) 自由時間の問題

それから、自由時間の問題、これは広い意味で勉強していただきたい。文部省でも生涯教育の一環といたしまして、放送大学とか、あるいは開放大学といったようなことも進められておりますし、今日勉強できる手段はいくらでもあらうかと存ずるのでございます。

(5) 今後の婦人に期待するもの

毎年大学に入学してこられる学生を見て思ひるのでございますが、日本の大学生に比べまして欧米の大学生はまことに大人である。日本は、要するに小さい時分から過保護で育てすぎているのではなからうか。先ほど申しましたように、ご婦人には余暇を勉強していただいて子供につかず離れず、立派な一人前の大人に育てていただきたい。

教育は学校の先生にまかせておけばよいのだとお考えになる方もあろうと存じますが、幼児の母親の教育は、その子供の一生を支配するほど大切なものを含んでおるのでございます。先ほど申した大学のあり方にもありますが、やはりその基盤となりますのは、幼児の家庭の教育、お母さん方の教育に端を発しておるのでございます。

最後に、私の散文詩をお贈りしたいと存じます。「心の糧」と題したいと思います。

心の糧を与えよう

いつの世にも 心の触れ合いは大切である

自分で考える力を養おう

みずから創り出す力を育てよう

自然との触れ合いの機会をふやそう

というのでございます。

とりどめのないことを申し上げましたが、ご参考と相なれば幸いと存じます。

御静聴どうもありがとうございました。

☆ シンポジウム

〔物と心を考える〕

講 師 茅 陽 一 
(東京大学助教授)

見 田 宗 介
(東京大学助教授)

八 見 康 子
(慶応義塾大学教授)

大 久 保 貞 義
(独協大学助教授)

司 会 三 枝 佐 枝 子 
(評論家)

司会（三枝） ただいまからシンポジウムを始めます。

初めに、第一分科会のリーダーでいらっしゃいます茅陽一先生にお話をいただきます。

第一分科会は、資源と生活の問題を中心として討議が行なわれることになっております。

それでは、茅先生お願いいたします。

茅 ご紹介いただきました東京大学の茅でございます。

分科会を進めていくための基礎的な資料として、やや堅い話になりますけれども、資源事情についての私の認識をまず申し上げて、どうゆうことを分科会で討論していただきたいと私が考えているかを申し上げてみたいと思います。

まず最初に、資源事情という問題ですけれども、私自身は、現在地球がかかえている資源問題と申しますのは、実は絶対的にないとかいう問題ではない。むしろ公害環境といつた環境面からの制約と、それから、消費速度が早過ぎるために技術進歩がそれに追いついていけないという、そういう問題であるという考え方をとっております。

したがって、そのような状況を解決するための現在のわれわれの方策としては、経済成長を抑制するしか基本的には方法がない。それがまず第一に私が申し上げたい点でございます。この内容について多少説明しなければわかりにらないと思いますので、ちょっと説明申し上げます。

特別講演で丹羽先生がある程度お話をされましたけれども、私自身の個人的な認識で申しますと、資源問題、これは実は非常に広うございまして、エネルギー資源、一般鉱物資源、それから食料資源、さらにはその他の生物資源、これはたとえば林業資源であるとか、そういうものを含んでおりますけれども、この状況というのは、物理的に計算をいたしますと、ほとんどの場合、絶対量でわれわれが困るという状況には現在はないものが多いわけです。

例を申し上げます。たとえばエネルギー資源というものがございまして。

エネルギーというものを考えてみた場合に、石油、石炭、それから天然ガス、さらには原子力といつたものが、とりあえずわれわれの目の前に出てくる資源なのですけれども、絶対量から申しますと、石油はともかく、ほかの資源は非常に大きな容量を持つているわけです。

石油の場合、われわれが現在知っております石油の量というのは、大体现在の使用量で30年分ぐらいなのですが、地質学者の推定によりますと、その4倍程度まではわれわれが使えるであろうという予想が立っております。

石炭の場合には、大体その20倍程度世界中にあるということはわかっております。それから天然ガスの場合には、石油の6割程度。

そのほか資源といたしまして、原子力を取り上げてみますと、原子力の場合、われわれが現在使っておりますウラン鉱石ですと、これは実はそうはないのですけれども、最近では海水中からウランをとるか、あるいはウランではなくて重水といったものを利用いたしまして、それとリチウムを使って核融合を行なうといったことが、将来技術として盛んに言われております。

さらに太陽熱といったものを考えてみますと、このエネルギーというものは、年中空から降ってくるわけですから無限に近い。

したがって、物理的な量からいえば、エネルギー資源の場合には非常にあるわけです。

ただ問題は、われわれが現在使っているエネルギーが、石油に非常に頼った形になっている。それが実は量的にはあまりなくて、それからほかの資源へ移ろうとすると相当に時間がかかるといった問題があるわけです。現在、たとえば日本の場合には、73%のエネルギーが石油になっておりますけれども、先進諸国では多かれ少なかれそういう傾向を持っている。石炭があるからでは石炭にすぐ戻れるかということ、実はそう簡単にはいかないわけです。

この札幌に住んでいらっしゃる方はよくわかりになると思うのですが、昔は石炭を暖房用にもつばら使っていたわけです。石炭をたくということは、実はその地域の空気を非常によごすわけです。ばい煙と、それからSOX、つまり硫化水素系の排出物というのは、石炭の場合に非常に大きいわけです。石油の場合、これはかなり現在ですと抜けるわけです。

こういった状態で、石炭に戻れと簡単に申しまして、現在のような石炭の利用方法であれば、そして現在のエネルギーの使用レベルでありますと、石炭に戻すということは非常に公害を増すということにしかならないわけです。

ほかの資源はどうかと申しますと、実は石炭のガス化、液化といった新しい技術、あるいはオイルシエル、タールサンドというアメリカ大陸に非常に多くございます別な形の資源、こういったものを利用するにいたしても非常に時間がかかるわけです。

なぜかと申しますと、これが1つの問題点なのですが、われわれが使っております資源というのは、ほとんど経済法則で支配されております。したがって、比較的経済的に引き合わないと考えられた資源についての利用の研究は、非常におくれているわけです。石炭の液化というのは、第2次大戦中ドイツで盛んに研究されたわけですが、しかし現在のように石油というものが利用される状況

になりますと、石炭の液化技術というのはほとんど研究されなかつた。現在になつて急にあわてて研究しているという状態が、実はアメリカでも日本でも起つているわけです。このために、時間的に新しい技術によつてわれわれの持つてゐるエネルギー危機を解決するというのが、非常にむずかしくなつてゐるという状況があります。

したがいまして、技術進歩によつて新しいエネルギー資源が使えるようになるまでは、われわれ自身としてはやはりどうしても資源の消費、特にエネルギー消費というものを押えていくしかない。おそらくその消費の伸び率といひのはせいぜい4%程度が最大だろうと思います。4%というところとびんとこないかもしれませんが、石油のこれまでの消費伸び率というのは大体世界中で8%です。日本は19%です。日本というのは世界の中でも異常な国でして、ほとんどの資源の消費の伸び率が、世界のほかの国に比べて大体2倍ないし3倍にのぼるわけです。とういつた状況から、われわれとしては、これを思い切つて落とすということがどうしても今後要求される。少なくとも新しい資源が使えるようになるまで、それだけの技術進歩の時間までは、われわれは落さなくてはならないという事情が1つあるわけです。

それからもう1つの事情は、実は公害の問題がございます。エネルギーの問題というのは、公害という面からもいろいろな問題がございますが、やや問題を交えて、たとえば鉱物資源で見ると状況がよくわかりになると思います。

鉱物資源というのは、これも非常に量はございます。たとえばわれわれが非常によく使つております鉄、アルミといふたもの、これは量的には、世界中で地殻の5%から7%はこいつた金属です。鉄の47%、アルミは7%。しかも最近のように、低品位の鉱石からさういつた金属を取り出すという技術が伸びてまいりますと、絶対量としてはほとんど心配がないと私は思つておりますし、世界的にも大体さういつた解釈が一般論です。

ただ問題は、その場合にあまり消費の伸び率が早いと、さういつた低品位の鉱石をうまく処理するような技術がついてこないという問題があります。品位が下がるというのは、経済的に引き合わないということだけではなくて、使わない部分が非常にふえるということです。

たとえば、アルミは現在大体50%から60%ぐらいの品位の鉱石を使つておりますけれども、これが半分の品位に下がつたらどうなるかと申しますと、大体使つてゐる鉱石の4分の3は捨てるということになるわけです。鉄、アルミというのは、世界的にみましても一番使用度が高い鉱物でございますが、これだけのものを捨てなければならぬということ、捨てる場所に困るという別な問題があります。

われわれは、ものを生産しているということを申します。しかし別な言い方をしますと、資源を消費している、つまり生産活動とわれわれが呼んでいたものは、実は地球という立場から見れば消費活動であつて、その消費のおりというものがどんどんふえていく、というようなことが現在のわれわれの位置なのです。したがって、われわれが資源の消費というのを無制限に伸ばしていきますと、要するにごみだらけになるという状況がわれわれの周囲にあるわけです。それが生活の中だけでなく、実は生産活動そのものに付随しても非常にある、ということが大きな問題として出ているわけです。

こういつたことから、われわれ自身としては、資源の問題というものは基本的にいえば、できるだけ使わない方向にもつていくべきだという発想にどうしてもなるわけです。

このときによく世の中で言われます対策として、たとえば産業構造を変えろとか、あるいは技術の進歩によつて使う量を減らすことができないか、という議論があるわけです。この考え方は一見もつともものですが、現実的には非常にむずかしいのです。産業構造といつた問題は、この婦人会議の場合には多少ハードな問題になるわけですが、実際、日本の産業構造というのが重化学寄りであり、これで日本が食べているということも事実なのです。世界的な国際競争力、世界の中における日本のGNPの高さというものは、鉄鋼の輸出というものを中心にして成り立っているということとはかくれもない事実ですし、いくらわれわれがきれいな環境をつくろうとしても、食べられなくなつては仕方がないということがあります。

したがって長期的にみれば、産業構造を変えるというのは非常に意味があるわけですが、われわれが食べられないという状態はやはりどうしても避けなければいけない。そういつたことから、直ちに産業構造を変えることによつてエネルギーとか資源の問題は切り抜けようというのは、これは早計だと思います。

それから、技術の進歩で使う量を減らせというのですが、技術の進歩で従来からすでにかなりやつているものが多いわけです。

たとえば、エネルギー1つをとりましたが、単位生産当たりでのエネルギー消費量というのは、あまり消費量が多くないところでは下がっているのです。たとえば、組立て加工の生産部門の電気機械とか機械工場のようなところでは確かに下がっているのですが、肝心な鉄鋼業とか化学工業の中では、エネルギーの消費というのはここ十数年ほとんど下がっていないのです。つまり、それだけ努力をしてわれわれはもうぎりぎりのところまできている。したがって、これ以上下げろといつても、よほどのことがなければ下げられないというのが実情なのです。したがって、産業構造とか、あるいは技術進歩で使う量を減らせという話は、話としてはわかりますが、現実には相当無理

がある。

となれば、われわれはどうしても経済の成長というものを押えていくしか方法はないということになります。私自身は、先ほど申しましたように、4 兆という線が1つの線だと思えます。これは、資源の消費率が大体GNPの伸び率と同じ線ですが、そういう状況で考えてまいりますと、われわれの生活の中での資源の扱いというのは、きわめてはつきりした意味を持つてまいります。

つまり、成長を押えるという前提条件で資源を節約するというのはどういう意味か。

1つは、われわれが使っているものの耐用年限、これをかなり延ばせということになるわけです。同時に、経済成長が落ちるわけですから、われわれの所得も伸びないということになります。日本の場合、ここ十数年間、高度成長によつて所得が年々10 兆ぐらい上がるというのが普通になつていゝる。場合によつては15 兆ぐらいかもしれません。

そういう前提条件の中でものを大事にしろということは、実は論理的に矛盾するわけです。われわれとしては、所得があまり上がらないということを前提条件にして、資源を節約するということを今後は議論しなければならないと思ひます。

いま申しましたような、耐用年限を延ばすという考え方がどうゆゑ意味を持ち、具体的にはどういうことをするべきなのかという問題が1つ。

それからもう1つは、ものを大事にするというのは、本質的な価値観の問題に結びつく可能性が高いということです。

私は、戦争中、小学生でございましたけれども、よく、米をこぼすとおてんとう様に申しわけないということばを教えられました。このことばは単に成長を押えるとかそういうものではなくて、ものというものは非常に大事なものだ、すべて天の恵みであるという考え方だと記憶しております。そういう形で、ものの問題というのは、人間の持つ本質的な価値観の問題と結びつけて考えるべきだと私は思つております。

そういう観点で、はたして現在のもの不足の状況というのはどう考えるべきなのか。そして、われわれはどうゆゑ考え方をもつてゐるべきなのか。そういうことを分科会の中でいろいろ議論していただきたいというふうに私は思つております。

これで私の話をひとまず終わらせていただきます。

司会（三枝） どうもありがとうございました。

次に、第2分科会のリーダーである見田宗介先生にお話をいただきます。文明と生活の問題を中心としての分科会でございます。

見田 私のところは、文明と生活というたいへん大きな問題ですので、ここでは、きょうあすを通じてそういった問題を考えていただくための素材のようなものを2、3お話して、問題提起にかえたいと思います。

初めに、最近たいへん面白いことを聞いたものですから、それをちよつとお話してみたいと思います。

これは私の専門外のことで、ある自然科学系の雑誌に載っていたことなのですが、ブラナリヤという動物があります。扁平虫というふうに訳されているわけですが、そのブラナリヤという小さい動物にある実験をするわけです。非常に明かるい光をあてて、同時に強い電流を流す。そうすると、強い電流を流されますから、当然縮み上がつてぎゅつと萎縮するわけです。そういうことを繰り返してやつておきますと、そのうちに明るい光をあてただけでもブラナリヤは縮み上がるというふうになつてくるわけです。

それは、昔からよく知られている条件反射という実験で、例のパブロフが犬についてやつたたいへん有名な過程です。そのブラナリヤを細かく切るわけです。切りますと、ブラナリヤというのは、切つた各部分がまた再生して1つ1つのブラナリヤになるわけですが、そのブラナリヤのどこの部分を切つてもたくさんブラナリヤができてくるわけですが、それは全部、やはり光をあてただけでも、あたかも電流を流されたときと同じように縮み上がるわけです。

その次に、ブラナリヤというのは共食いをしますから、そういう条件反射のできたブラナリヤを、ほかのブラナリヤに食べさせるわけです。そうしますと、それを食べたブラナリヤは全然電流を通じた経験はないわけですが、そのブラナリヤも、やはり同じように明るい光を見ただけで縮み上がるというふうになつてくるわけです。

それが、このシンポジウムのテーマ、物と心ということ、あるいは私の担当を抑せつかりました文明と生活という問題と、一体どういうふうにつながってくるかと疑問に思われる方もおられると思うのですけれども、それは最後に申しあげるとして、またたいへん突拍子もないようですが、鶏の話をちよつとしたいわけです。

最近の鶏というのは、ご承知のように狭いゲージの中に閉じこめられて、ホルモンか何かの処理をして去勢しますと非常に肉が柔らかくなりますから、鶏の食欲というものはかわりなしに、どん

どん無理やりに柔かいものを食べさせる。そういうことによつて、非常にぶよぶよとした、まあ肉は柔かくておいしい鶏ができてくる。

そうすると、その鶏が一生ダージに閉じこめられて、いわば食欲にかかわりなしに栄養分を流し込まれて、ホルモンの処理されていく、その鶏の持っている恨みみたいなもの、あるいは無気力さみたいなものが、それを食べているわれわれ人間に乗り移るということはないだろうか、ということをおふと思ひわけです。たいへん非科学的なお話で、冗談としてお聞きいただいてもよいのですが。

ところが、たとえば水俣病がありますね。これは先年たいへん騒がれてまして、映画とかいろいろなところでその悲惨な状態というのはよくご存じだと思います。ことしはもう一応裁判は終わつたということで、世間にあまり知られておりませんが、また患者さんの悲惨な状態というのはずっと続いていく、おそらく一生、あるいは子孫にわたって続いていくであろうと思われるわけです。

水俣病の場合は、最初起こる前にネコが狂つたわけですね。これはよく報道されておりますからご存じの方も多いと思いますが、人間が水俣病になる前に、ネコがたいへんおかしい行動をする。つまり、頭で地面の上に立つて、頭でもつてくるくる回つたり、そのほか非常に不気味な行動を水俣のネコはするようになった。それは、人間が水俣病になる何年か前からそうなつてきたわけです。

そのもつと前に、漁師の人たちが気づいていたわけですが、魚が狂つたわけですね。魚が海の中でいつもの動きとはまるきり違う非常に奇妙な動き方を、群をなしてするようなことが起つてきたわけです。そのときには、魚とか犬、ネコというのは、人間のことでなくて物のことである、そういうものは狂おうが何をしようがかまわないというような、漁師の人はそうではないのですが、工場の方ではそういった観点でどんどん有害物質をたれ流していつたり、あるいはそういった産業を起こしていつたわけです。それが結局、その魚を食べた人間たち、そのまた子供たち、そういったところからいわゆる胎児性水俣病というような、生まれながらに非常に悲惨な運命を背負つた人間たちとして生まれてくるわけです。

つまり、その場合の考え方というのは、人間の目先の利益にとつて関係のないようなものというのは狂おうが殺そうがかまわないというような、そういった物に対する感覚、人間と物との関係に対する感覚が全体にあつたわけですが、ところが、その物が狂うということが、やがて人間自身が狂うということにつながつていつたわけです。これは水俣病だけではなくて、カドミウム汚染とか、いろいろなところで同じようなことが起つてきている。

どうしてそういうように物が、つまり魚とかネコが最初に狂つたのだろうかということ、実はその前に人間の種がどこか少し狂つていたのではないだろうか、ということがあるわけです。

またたいへん突拍子もない話ですけれども、たとへば大根なんかにやる肥料があります。その肥料というのは、アメリカのある学者の説によれば、その大根にやるのではなくてミミズにやるんだと、あるいは土の中に生きているバクテリアにやるんだという説があるわけです。つまりミミズとかバクテリアがその肥料を食べて、そしてそのミミズとかバクテリアが土の中にある木の葉っぱとか、あるいは虫の死体とか、もつと大きな動物の死体とか、そういうものを分解して、大根の成長にとつて必要なものを分泌する。それによつて大根が大きくなつて育つ。その大根を人間が食べる。その人間のまた排泄物を土にやる。そうするとその土の中で、ミミズとかバクテリアが繁殖して大根を育てる。そういうサイクルがあつたわけです。

ところが、その考え方を短絡しまして、このごろのように農薬を使うようになると、ミミズとかバクテリアは全部死んでしまうわけです。当然大根も農薬を吸収して育つ。そうしますと、その農薬で育つた大根を食べた人間の子供に、また奇形が生まれたりする。これは、たとえばレーチェル・カーソンという人の『沈黙の春』という、これは有名な本ですのでお読みになつた方が多いと思いますが、この本に出てくる話ですけれども、つまり、人間の目の利益というのは大根を育てることであつて、ミミズやバクテリアは人間にとつてどうでもいいと。ですから、人間の直接の利益にとつて要らないものは殺してもかまわない、そういう考え方になつてきて、いわば初めのような自然の循環が破壊されてくる。そのことによつて、最初は大根はもつと簡単に育ちますから、たいへん人間の利益になるわけです。ところが、それがいつの間にか何代目かの奇形というような形で、人間にはね返つてくるというようなことがある。つまり自然の有機的な連環の破壊というものが、さまざまな因果関係を通して結局人間の破壊につながつていく。そういうことを昔の人は直感的に感じとつて、ミミズの恨みだというふうな、一見非科学的な言い方で考えたのではないだろうかと思うわけです。

ある農業団体で、農薬を使つた大根と農薬を使わない大根を比較した実験があるわけですが、そうしますと、農薬を使つた大根は非常にかつこうはいいけれども貯蔵力がない。農薬を使わない大根のほうは、非常にかつこうは悪いけれども貯蔵力にすぐれている、それから味が非常にある、というふうな結果が出ているわけです。

そうすると、やはり農薬を使わないほうがいいというふうになつて、それで農薬をやらないで大根をつくろうとしますと、現実問題として、これは農家の方はご存じだと思いますが、農薬を使わないと今の大根は育たないわけです。少なくとも普通の大根は育たない。ということは、農薬で育つた大根からとれた種は、農薬を使わないと育たないわけです。ですから、いま普通に大根の種を買つてきて、農薬を使わないで育てようと思つても、一応できますけれども非常にできが悪い、ということになつていっているわけです。

さつき鶏の話が出ましたので、大根から鶏の話にいきますけれども、鶏の場合、いま普通の飼ひ方というのは、これは農家の方のご存じだと思いますけれども、すりえといいまして、ひよこのときはえさをすつてやるわけですね。ところが、先ほどの農薬を使わない大根の実験をやつた農場では、わざとえさをすらないで固いまま、つぶのままひよこにやるわけです。そうすると、ひよこはたいへん苦勞しまして一粒一粒食べるわけですね。そのうちだんだんと栄養があまりないものから栄養を吸収する能力がひよこにできてくる。こういう機能はもともとひよこにあるわけですが、すりえ育ちの、初めから栄養分の高いものを食べさせたひよこは、そういつた機能が低下していつて、非常にとりやすいものからしか栄養がとれないというふうになつてくる。

あるいは、その農場ではわざとわらを敷いて、わらを敷いた上に麦をまいてやるわけですね。そうすると、えさはわらの中に入り込んでしまいますから、鶏は腰を曲げて足でもつて麦をけり出さないで麦が食べられないということになつてくる。たいへん足腰が鍛えられまして、たとえばその卵も、お母でもつて黄味だけ取りあげてもつかめるくらい、非常に固い卵ができるわけです。いま都会あたりの普通の卵というのは、箸でつかもうとしますと黄味がくずれてしまうわけですが、そういうふうに、卵自体がまるで違つてくるわけです。

ニフトリが[●]らいきなり人間にいつては失礼かもしれませんが、たとえば赤ん坊を育てる場合に、母乳のほうがもちろん人間にとつては非常にいいことは、最近新聞などでもいわれておましてご存知だと思うのですが、その場合に、母乳がこのごろあまり出ないお母さんが多くなつたので、ミルクと半々ぐらゐにしてやる。そうしますと、これは赤ん坊によつて多少個性差があるそうですが、普通の場合には、ミルクの方をだんだん飲むようになつて母乳は飲まなくなるわけです。

どうしてかといいますと、母乳は吸うのになん力が必要わけですね。苦勞して吸わなくてはならない。ところが、ミルクの乳首というのは非常に柔かくできておりますから、はるかに吸いやすいわけです。そうするとますます母乳は飲まなくなる、と母乳は出なくなりますから、結局ミルクだけしか飲まなくなつてくる。そのことはやはり象徴的な話だろうと思うわけです。

そういつたことが前置きで、そのことの意味を少し考えてみたいと思うわけですけれど、そのことからたとえば1つは、近代文明の原理というものはどういふものであろうか。あるいは物と心、あるいは人間と自然というものがどういふふうにかつていくことをわれわれは考えることができるだろうか、そういうことを多少理論的に展開してみようと思つたわけです。

つまり、「物と心」ということで最近言われていることは、物がたいへん豊かになつた、しかし心の問題がまだなので、いわば物の豊かさというものから、心の豊かさというものをこれから考えてみよう、というような問題の設定があると思うのですけれども、その問題の設定の仕方に多少ひつか

るところがあるわけです。

ということは、物を豊かにしたいということになつてはいるわけですが、ほんとうにわれわれは物の豊かさというものを追つてきたのだろうか。あるいは物の豊かさというものをほんとうにわれわれは実現してきたのだろうか、という問題がまずあるわけです。実は現代文明というものは、逆に物を貧しくしてきたのではないだろうか。つまり物の豊かさではなくて、実は物の豊かさを追つてきたつもりでありながら、物の貧しさというものを追つてきたのではないだろうか。

あるいは心の豊かさ、たとえば物の豊かさがもうこれで十分になつたから、これからは心の豊かさだということではなくて、心の豊かさのないものが、はたして物を豊かにすることができるのだろうか。そういうようなことを少しきょうあすと分科会では考えてみたいと思うわけです。

これで一応問題の提起にかえます。

司会（三枝） どうもありがとうございました。

いきなりプラナリヤとか、鶏とか、大根が出てきましたのでびつくりいたしました。だんだんお話をまとめて私どもの問題に結びつけてくださいました。

それでは、次に第3分科会の人見康子先生にお話を聞きたいと思います。

第3分科会では、人間関係を中心として話し合いが行なわれることになつております。

人見 いま見田先生が、人間の歴史というのは、かなり物の豊かさを追求してきた歴史がある、というようなことをおっしゃつたわけですが、それと関連しまして、実は人間関係のある時代まではかなり物の豊かさを追求するという、少なくともまぼろしですが、それを追つてきたのではないかと考えられるわけです。

これはご承知のとおり、人間が一番最初にほかの人とかかわりを持つのは、誰かのところの子供として生まれるという形で、血のつながりというのが一番最初の人間関係になるわけですが、この人間関係の一番最初に出てまいります血縁関係の場合におきましても、どうも物の豊かさを追求ということとかなりかかわりがあるようです。

なぜかと申しますと、大体昔の人間の生活を支えます経済活動の主たるものは、農業が中心になつていたわけですが、その時代には、人間の労働力だけが物をつくり中心になつていたわけです。そこで、親が子供をもつということは、同時に農業の労働力を増すんだという考え方がありまして、そういう意味で血縁関係をつくり出す場合にも、かなり物を追求するという考え方が基準になつてい

けです。

同時に、それは結婚という問題を考えましても、これはつい最近まで強く残っておりまして、現在農村でも、結婚というのがしばしば労働力をふやしたいということのために行なわれる。したがって、本人たちが本当に結婚したいかどうかということは無視して、むしろ、労働力として十分な力を持っているか持っていないかという形で結びつきを考える、ということがよく見聞きするところになっているわけです。

ですから、そういう形で物の支配ということは、人間の血のつながりを決定するような場合にもその支配原理として出てきたわけなのですが、そのうちだんだんに労働力の生産性が上がるにつれて、これは必ずしも血縁の関係ばかりではなしに、もう1つ別の人間関係が出てまいります。

これは、いわゆる地域社会と呼ばれておりますけれども、農村の場合には、自分の血縁者のほかに、一種の地域的な条件が決定的になるものですから、そういう地域社会の形成ということも、農業を推進させる上においてどうしても必要やむを得ざるもの、そしてこれは、やはり農産物を余計獲得しようという物の支配の原理に従いまして、地域社会というものが形成されてくるわけです。

そういう意味で、どうも人間関係というものが血のつながりを中心にして、あるいは地域的な便宜を中心してできあがっておりますけれども、その場合に、物の支配ということが、人間関係をつくる1つの決定的な動機になっております。

ところが、そういう人間関係が大きく変わってまいりましたのは、人間の生産というものが大きく変わる段階でございます。これは産業化と通常呼ばれておりますけれども、いわゆる機械というものが発明される、人間の手の力でやるのとは決定的に違つてたくさんの物をつくり出せるという、非常に生産力がふえる段階が出てくるわけなのですが、この段階におきまして、人間関係は大きく変化をしております。

それは、いままで血縁団体に頼つて物をつくつたり、あるいは地域社会に頼つて物をつくつてきたということが、今度は機械を頼りにして物をつくるという形になりますから、いままでのように、その血のつながりを重視した人間関係というのは必要ではない。あるいは地域的なものはむしろ必要ではなくなつてまいります。

そこで、こういう工業化の時代から非常に人間関係が変化してきた。それはどういふ変化かといいますと、人間関係の中において、従来は非常に物を重視しておりましたが、今度は人間の心の問題、これは人間がある以上は常に心の問題というのはあつたと思うのですが、心の問題が従来とは非常に

違つた関係になります。それはどうしてかといへば、従来の、物があまり生産されなかつた時代には、人間は、自分の心の動きと相反するような行動を時によつてはとらざるを得ない。

つまり、物を得るためには、誰か物をもっている人の言うことを聞かなければならないのだという意味での、非常に人に依存するという気持ちからどうしても抜けられなかつたわけです。

ところが、非常に物がたくさんできるという産業化の時代になりますと、あらゆる人は少なくとも、いままでのように誰かに依存しなくても生活できるという社会的な条件ができ上る。少なくとも工場へ行つて働けばお金がもらえる。そしてそのお金がもらえれば自分の生活に必要なものは買えるはずなんだと、こういう形になりますものですから、誰か人に寄りすがらなくても自分で働く限りは自分の生活に必要なものは確保できる。したがつて、その必要なものを確保できる限りにおいては、他人に依存する心というものは持たなくていいのだという形になりまして、かなり精神構造というのは変わつてきたのではないかと思います。

ちやうとそういう産業革命と同じところに、フランス革命というのが起つてまいりますけれども、そのフランス革命の1つの標語として、人間の自由とか平等という心の問題、あるいは精神状態といひますか、これが取り上げられてまいります。これは単に自由とか平等という心の要求だけを主張しても実現されなかつたのであつて、そういう1つの物に対する条件の変化というのが、人間の精神の変化というものを招いたのではないかと考えるわけです。

そうして、そういう人間の心の変化というものが、現在では社会の体制の中にほぼ組み入れられておりまして、あらゆる人間の自由を保障するということは、法律の中においても取り上げられているわけです。

そういう形で、近代になりましてからの人間の心の変化というものが社会の中に定着してきたわけなのですが、この問題がまた最近になりましてから大きく変化をしております。

それはどのような変化かと申しますと、先ほど申しましたように、フランス革命以来すべての人は自由であり、平等であると言われたのですが、実はその中で、すべての人間ははたして自由であり平等になつたかといひますと、実は、自由であり平等になりましたのは大体男性で、女性は自由であり平等ではない。

それはなぜかと申しますと、つい最近までそうだつたのですが、女の人には生まれながらに自分の生き方というのが決められてしまつています。現在の日本の社会で、男性でも自分の生き方を決められてしまつていふのは、天皇のうちに生まれた皇太子だけです。あとの人たちは、自分でこういう生き方をしようと思へば本来的にはでき得る余地があるわけです。

ところが女性の場合には、昔は、親の家からある時期に夫の手元に渡されて、それ以外の生き方は

許されない。そして、そういう決定をするのは誰かといえば、これは親であつて、そして夫の手元に渡されれば、今度は夫の意思によつて行動しなければならないという形で、非常に依存した生活というのが女の人についてだけは要求されていた。

これが最近になりましてから非常に変わつてまいりました。

それはどういうことかといいますと、現在の社会というのは非常に工業化が進んでまいりまして、高度産業化社会、あるいは高度経済成長と呼びますような状況になつてきております。その中で昭和40年ぐらいからの統計をずっと見てまいりますと、女性の生き方というのが非常に多様化してきております。それは特に、いままでのように、女の方は家庭の中だけにいるのではなく、外に出て働くという現象です。実は一部の女性のあいだではそれ以前から、親のうちから夫のうちにすぐに移るのではなくて、だんだんとその間に中間の段階が出てきております。しかしその現象というのは、どちらかといいますと、社会の中では低所得の人たちの中に一般的な現象であつて、いわゆる上流あるいは中流以上のうちではあまり見られない現象であつたわけです。

ところが、その現象がだんだんに一般に広がつてまいります。これは、自分たちの生き方の自由がなぜ男の人と同じように求められないのだろうかということで、自由平等を求める女の人たちの生き方が1つのきつかけになつておりますけれども、特に、高度成長下になりましてから出てまいります新しい現象としましては、既婚婦人が、社会の労働に参加する率が非常にふえてまいりました。大体婦人労働者の数そのものがふえますが、特に既婚婦人が、婦人労働者の中の50%以上を占めるといふ、かつて考えられないような現象が出てきたわけです。

こういう新しい形が、いままでの女性に対して、新しい女性の家庭内での地位、並びに社会での地位として出てまいりまして、一体婦人というのは、家庭内において、あるいは社会においてどういう役割を占めるのだろうか、という問題として出てきているわけです。

その場合に女性がなぜ労働に参加するかといいますと、これは他面には社会の中で労働力として婦人を必要とするということがあり、それとも単純労働力としての必要ということで引つ張り出されている面が多いものですから、そういうような形で社会に参加することがはたしていいことか悪いことかという問題は、かなり議論の余地があるかと思いますが、少なくともその1つは、社会に出ざるを得ないという状況が出てきている。

それは、現在の家族というのが昔と非常に違つて、従来は、大体夫1人でかせいでくるお金によつて妻とか子供とかがみんなそれに依存している、という形になつていたわけです。そして、そういう経済的な依存関係が、同時に精神的な依存関係、あるいは心の上での依頼心、そういうものに結びつかざるを得ない。ところが、それに必ずしも満足しないという女性たちの動きが、そういう新しい

活動を支える1つの原動力になつてゐるのではないかと思うわけです。

そして、そういう新しく出てきた家族というところにおきまして、いままでとは非常に違いますのは、夫婦とか親子というものは一体なぜ結びつくのだろうか。あるいは、それを結びつける精神的な支えというのはいかなるのだろうか、という問題を考えずにはいられない。これは、経済的な依存関係だけではいかないのだということになりますと、夫婦、親子を支える精神的なもの、あるいは心というのはいかなるのだろうかという問題としてとらえられてくる。

そのときに、かなり現象的な問題としまして出てまいりますのは、親と子供との世代間の断絶、あるいは夫婦であつても実際にはなかなか親密な心の通ひ合いができない。あるいは、現実には夫の働く時間が長いために夫不在である。あるいは夫が転勤で、妻と子供を置いて単身赴任する、というような状況がかなり出てくるわけです。

ですから、そういうようなところで現在の家族というのは、少なくとも経済的なある程度の依存関係というものがきずなになつてゐるのだけれども、家族というのは、ところによつてはこわれかかつてゐるという現象も出てきておりまして、これは現在の社会の中における家族の安定性といひますか、血縁の不安定さというふうなものとして問題になつてゐるわけです。そういうような点で、高度産業化の社会においての人間の家族生活を支える物と心というのは、どんなものなんだろうということが1つの大きな問題点になります。

それからもう1つでてまいりますのは、地域社会ですが、昔の農業を中心とする時代の地域社会というのは、どうしてもその地域に定着していなければいけないという形がありまして、それだけに非常に緊密な関係というのはあつたわけです。

ところが、現在の社会になりましてからは、たまたま人間はある地域社会に住みますけれども、これはたまたま転勤でちよつとの間そこにいるだけにすぎないという形で、かなり人間の生活が移住あるいは移動するという形になりますと、地域社会に対する愛着といひますか、そういうものはかなり減つてくるわけです。そういう意味で、かつてのように非常に地域社会に密接に結びついてゐたという時代と違ひまして、地域社会の無関心というものが、現在の人たちの少なくとも職業的な面から出てくる現象になつてくるわけです。

ところが、そういうような無関心ということでもありますにもかかわらず、もう1つ高度産業化社会になりましてからの大きな問題は、高度経済成長に伴つての技術の進歩というものが、いままで考えなかつたような新しい問題、いわゆる公害問題という形で、もつともはつきり出てまいります。この公害問題を解決する、あるいはそれに対するいろいろな対策を講ずるという場合には、どうしても一

地域の人たち全体の問題としてとらえざるを得ない問題となつてきます。

そうなつてくると、やはり地域的な心のつながり、あるいは連帯ということがなければ公害問題に
対処できないということがありまして、地域社会を横につなぐ物と心といえますか、こういう問題が
1つの新しい問題として取り上げられざるを得ないのだろうと思います。

そういうわけで、近代の社会になりましてからの新しい物の生産状況に応じて、新しい人間の心と
いうのは一体どうあつたらいいのかということがまた大きな問題点になるわけですが、その心の問題
という場合に、一体どういう心かということがもう1つ内容的に問題になる。先ほど申しましたよう
に、大体近代以後考えておりました人間の心の中心は、人間というのは自由を求めるものである。あ
るいは平等を求める。あるいは独立を求めるという形で、ある意味では自分のエゴの確立、あるいは
自己の確立ということが中心だつたわけです。

ところが、その自己の確立だけでは済まないというのが、現在の社会における1つの心の問題では
ないかと思います。これは実はフランス革命のときに、自由平等のほかにもう1つ、博愛ということ
が主張されていましたが、大体いままでの社会では、あまり博愛ということ言われなかつた。これは
せいぜい慈善というようなことで、自分が気にいつたらやるんだという形で、博愛という問題は全く
偶然の事実にかせられた。

しかし、この博愛という問題は、今度はそういう偶然の個々の人たちの心にまかせておくというだ
けでは済まない問題としてある。と申しますのは、現在の社会は、すべての人が自由に、あるいは独
立して平等に生きられるはずであるというのはたてまえの問題であつて、現実には、人間の中には
病気の人もいれば年寄りの人もいるし、小さい人もいるし、あるいはみなし子もいるしというよう
に、人間の生活の独立を支えるだけの十分な状況ではない人がいるわけです。一体そういう人たちの
問題をどう考えるかという問題が出てまいりまして、これは社会福祉という問題になつてとらえられ
ております。

そうしますと今度は、社会福祉を支える場合には一体どういう心が必要なのかということで、こ
れもやはり人間関係を考えます場合の、心ということになるわけです。

そういう意味で人間の心というような問題は、過去から引きずってくる心の動きと同時に、これか
らある社会、あるいは社会の物的条件に対応して、人間の心というのはどのように展開されてい
くかというようなことを、今回の分科会で考えてみたいと思います。

司会（三枝） どうもありがとうございました。

次に第4分科会の久保貞義先生にお話をいただきます。

第4分科会は、自由時間の問題でございます。

久保 この会議は、日本を考える「物と心」ということで、そのうちの自由な時間というのが私の与えられた課題です。

自由な時間というのはどういう時間かという、コントロールされない時間である。しかし、このコントロールされない時間といつても、2つの意味があると思うのです。1つは、何かをしようと思つても何もすることがない時間。もう1つは、することはいつばいあるがみずから何もしないという時間。

つまり最初の、何かしようと思つても何もすることがないというのは、失業状態などをさすわけですが、発展途上にある国のうちには、何か職業を得て働きたいと思つても何も職がない。そのため何もしないという時間ということで、働く場所はいつばいあり仕事も持っている、しかし自由に仕事から離れて遊ぶ、あるいは自由な時間を過ごすという、先進国の自由な時間とは全く違った次元であるということです。

仕事をやろうと思えばいくらでもあるが、しかし余暇時間を求める。これが先進国の非常に大きな問題となつているわけです。したがつて、貧困な社会、あるいはGNPの低い後進国では、この問題はあまり問題とされていないわけです。あすにも食べるものがないというときには、自由な時間というようなことはとても言つていられません。あるいは、仕事もなく働く場所もないというときには、余暇という考え方は全くないのであります。とすると、余暇と労働というのはまさに裏表一体の関係にあるということがわかりだと思ひます。

余暇と労働をどう分けるかというのは、いろんな人たちがいろいろな哲学的なことを言つております。しかし、私は私なりの概念として、労働というのは収入の時間である、そして余暇というのは支出の時間である、消費の時間である、というふうに概念づけております。

日曜大工をして隣のうちの塀を直して収入を得た場合、それは労働であります。しかし、日曜大工を楽しむのは余暇であります。魚を釣りにいって、魚を自分で食べてしまうときは確かに余暇ですが、それを売つて自分の生活の糧にしようと思うときは、それは労働であります。したがつて、消費の時間であるか収入の時間であるかということで、余暇と労働という概念が明確に規定できるというように私は思ひます。

それで、貧困な時代には支出をする、つまり消費をするということは非常に楽しいことです。なかなか消費できませんから物を買うというときは非常に楽しい。しかし豊かな社会になりますと、消費することだけで、つまり買物だけでは楽しみは得られない。つまり、買物をするとか何か自分のほしいものを買うというのではなくて、その支出を社会的に使おうというときに喜びを感じます。この心理は金持にならないとなかなかわかりにならないと思いますが、GNPが非常に高い社会になりますと、多くの人たちが非常に高い収入をもたらす。そして支出の時間に対して非常に長くかける。しかし、ただ自分のほしいものを買うだけという、自分のエゴを満足させるだけではなかなか満足しない。さらに社会的な貢献をしたいというときに初めて満足感が起るわけです。つまり、自分の労働力で得たお金を、報酬を通じて自己の社会的存在を確かめるときに、初めて喜びを感じるようになる。これは、人間が社会的存在である限り、どんな国の人間でも感じる意識だというふうに私は思います。

日本人は、いままで寄付行為、あるいは社会的奉仕ということをほとんどしていない。それはなぜなのかというと、私は、日本人が先天的にエゴイステイックな人間であるというのではなくて、日本が非常に貧しい社会だったから、そういう精神が芽生えなかつたのだらうと思っているわけです。

アメリカの社会、ヨーロッパの社会では、金持が慈善事業に、あるいは大学に寄付をして死んでいく、また死ぬ前にも、寄付するという行為によつて自己の社会的存在の意義を確かめ、それによつて満足感を得ているわけです。そういう違いがある。

どうして日本の社会にそういう社会的な貢献に対して楽しみを感じるような価値観が生まれなかつたかというと、私はそれは学校教育にあるというふうに思っております。つまり、非常にエゴイステイックな教育に専心しているという日本の教育のシステムが、日本の社会をそのような社会的貢献というものに対する評価を低くしている。

日本の教育の特色は何かというと、それは能力主義あるいは学歴主義による差別ですね。18才になると大体自分の将来が決定してしまう。あるいは、非常に激しい産業社会の競争主義である。幼稚園から大学まで、すべてそういう自分の頭脳に知識を吸収するという競争に明け暮れる。そういうことを繰り返しますと、その詰め込んだ知識を社会に対して役立てるという訓練は、日本の社会において全くできません。

こう見ると、私は日本の教育は全く失敗だったというふうに思わざるを得ない。

日本の教育というのは、いまのような失敗もありますが、同時に、百年間に先進国の仲間入りをさせたという、あるいは、日本の社会がこれまで産業化した背景には、日本が教育に力を入れたからだ

というメリットもあるわけですが。

しかし、繁栄を永久に続けた国はないということがいままでの歴史上確認されておりますから、日本もいずれ滅びていくであろう。それは何によつて滅びるかという、私は教育によつて滅びていくのではないかと感じております。

日本の教育がはたしてどのような失敗だつたかということは、いろいろな面から具体的にわかるのです。たとえば、日本の企業のエリートたちが今度の国会に呼ばれ、その中で企業の利益ばかり追求していたということがいろいろな点からわかつた。このことはつまり、日本の企業のトップレベルの人たちは、日本の教育のエリートたちである。つまり、日本の教育でもつとも傑出した人たちがそういう企業組織のトップに立つた。そこで明らかにされたことは、社会的貢献度というものに対して全然理解がなかつたということです。ということは、やはり私は日本の教育というのは全く失敗であつたように思うわけです。

ちよつと話が横にそれましたけれども、そういう中から日本の社会が消費に目を向け出したということは、非常に大きな意義がある。ただこれは、日本の貧困の社会に育つた人たちが、豊かな社会にどう過すかという非常に大きなインパクト、つまり衝撃があるわけですね。つまり、貧困な価値観が豊かな社会の中でどう生活するか、という問題だというふうに理解しています。

つまりそのことは、いままで必死になつて働いていた人たち、いわば労働の価値だけを信じて消費を信じない人たち、つまりもつと言うならば、勤勉だけが美德だと思つていた人たちが、消費の社会に入つたときにどのように生活するか、どのような生活様式を身につけるかという問題であろう、というふうに思います。

いままで日本が貧困だつたときには、とにかく働かなければならぬ。そして会社で早く高い地位に昇進し、高い給料をもらつて、あらゆる努力をしてピラミッドをのぼつていくことが、いままでの日本社会の重要な価値観であります。そして今度は逆に、企業といふ組織は、そのポストとか、給料とか、その他の余禄を提供するわけです。

そういう非常に勤勉だつた人たちが会社にいる間は、非常にいいわけですね。つまり会社の価値観を信じて企業的に行動する。しかし、人間誰でも生理的に老令化がやつてきます。つまりライフサイクルの最後の時期がやつてくるわけです。会社の価値観あるいは競争社会の中だけで生きていた人たちが、あるいは労働の価値だけを信じていた人たちが、定年後企業的な場からはずされ、労働の中だけの価値観からはずされたとき、つまり肩書も何もなくなつたときにその人間は何で生きるか。その人間の社会的存在意義は何んであるかという問題が今後大きな問題として登場してくる。

これは、物だけつづつていた人間が起つて1つの悲劇であります。人生すべて物だけつづくという、

エコノミックアニマル的な発想を持つ人たちが、エコノミックアニマル的なことだけをせざるを得なかつた人たちが今後多くなり、日本の社会の老令化現象をつくつていく。つまり日本の社会は、今後まぎれもなく高令化社会がやつてくるわけです。推計学上、99%高令化社会がやつてきます。そうするとそのときの問題は、年金を5万円にするとか、10万円にするとかいう問題ではなく、定年退職者がその社会的存在意義をどこで感じるか、いままでこの世に生まれて物だけつくつていた、あとは全然価値がなかつたと思つている、その人はどのように生きるのだろうか、ということが非常に重要だと思うのです。

そして、日本の社会は高令化とともに、やがて高学歴社会になつていく。自分自身について考える知識が豊富な高学歴社会ということになりますと、ますます悲劇がやつてくる。ですから、この自由な時間という問題は、これからの日本が高令化社会になり高学歴社会になつたときに、人間はどのような生き方をすべきかということを考えなければならない、ということを示していると思います。

そして、いままでの日本の価値観は、まさに労働の価値観だけが優先していた。つまり余暇の価値観というものが全くなかつたわけです。そこで、支出する時間、消費する時間というものに対する新しい価値観が必要だし、そういう習慣を見につける必要がある。

欧米の社会では、キリスト教その他の長い歴史の積み上げのために、自由とか平等とか、さらに博愛という思想が脈々と流れているわけですね。日本の社会にはそれがない。ということは、日本の社会が金持ちになり、先進国になり、GNPが高くなつたときに、どのように社会に奉仕するか、どのように社会に貢献するかという考え方を、どのように身につけるかということが非常に重要ではないかと思います。

そして、日本の社会はGNPが高くなつて先進国になりますと、いやがもうでも国際社会の中でリーダーシップを占めてくる。そうなつたときに日本の考え方、価値観というのはどうかというと、世界の中において日本的な価値観というのは、まさに極限の価値観というか、世界の主流の中から大きくはずれている価値観を持つている。

具体的に申しますと、日本人というのは非常にやさしい側面があるかと思うと、非常に残酷であります。非常に柔軟かと思うと、非常に硬直であります。外国の文化を柔軟に取り入れるということをやるとかと思うと、全く融通のきかない硬直した考え方を持つている。

非常に臆病かと思うと、あるときは非常に大胆である。そしてあるときは非常に優越感を持つけれども、あるときは劣等感を持つ。ヨーロッパに対しては非常に劣等感を持つけれども、東南アジアに対しては非常に優越感で臨む。このようにアンバランスの非常に強い価値観を持つている、アンバランスの強い国民性であります。

こういうこと、つまり二重性といいますか、言っていることとやっていることが実際に違うという社会は、外国人にとってきわめて理解しがたいわけです。そのことが、私は東南アジアにおいて反日感情を生んだというふうに思うわけです。

つまり、日本人は物は輸出できるけれども心は輸出できない。日本の輸出力というのはたいへんなものです。しかし、イギリスでもアメリカでも物を輸出すると同時に、その国の価値観を輸出しています。イギリスは帝国主義を、アメリカはアメリカンデモクラシーを、それぞれ輸出しているわけです。しかし、日本は輸出するものがないですね。物はありますけれども心はないのです。

そして日本の価値観というのは、コスモポリタリズムというか、そういう国際的な価値観の中から大きくはずれている。

私の大学時代の友だちがいまエカフエというところに勤めております。バンコックにあるわけですが、彼がそのエカフエという国際機関に勤めたときにそういった現状を見て、彼は、タイのバンコックにある心身障害児の施設にみんなでポケットマネーを出して寄付しよう、ということをやったわけです。いまでも細々と続いているはずですが、しかし、日本の商社の支店長たちは全く見向きもしないわけです。これはまさにエコノミックアニマルの最前線ですから、とにかく収益をあげて、そのデータが本社に送られ、それによつて昇進していく。重役になるためにはどうしても利益をあげなければならない。

こういったエコノミックアニマルに完全に染まっている人たちは、そういった社会に奉仕するという考え方が全然ないわけです。多くの人たちがこういう行為に参加するかどうかということが、その社会の価値観を決定するわけですが、日本人はほとんどこういう精神がないわけです。それを人見先生は、博愛という精神がないとおっしゃいましたが、つまり、日本人の人間に対する考え方というのは、全く無知であり、知識はあるけれども無教養である。

こういう日本が将来どういうふうになつていくだろうか。つまり、社会に対し奉仕するとか、あるいは貢献するという思想を持たない日本民族が、はたして今後どのような道をたどるか。具体的に言えば、物だけ輸出して心を輸出できない民族が、どのような道をたどるだろうかということは、非常に大きな問題ではないかと思うわけです。

以上、簡単ですがこれで終ります。

司会（三枝） どうもありがとうございました。

これで4人の先生方のお話は終わつたわけでございますが、先生方のお話は、たいへんに穏やかな

おことばの中に、非常にショッキングな問題を含んでいるのではないかと思います。

これから皆さん方のご質問とご意見をお受けします。時間をできるだけ効果的に使いたいと思いますので、まずどうしてもこの問題はここで伺っておきたい、そうお考えになる方から、どうぞご意見、ご質問を述べていただきたいと思います。

議員（A） 第3分科会の人見先生にお尋ねしたいのです。

自由、平等、博愛というのが西欧にはあるけれども日本人には博愛という精神がない。とおっしゃいましたけれども、私の意見は先生のおっしゃいましたことと少しぶつかるのですが、明治百年からこのかた、日本人は大いに教育の成果を得まして、近代ヨーロッパ精神というものを追いつけてまいりました。

その近代ヨーロッパ精神というのは、神を否定してから以後のことで、つまり日本は、博愛とか、キリスト教精神のある程度抹殺された時代のものを、一生懸命百年間求めてきたのではないか、そういうふうに思うのです。

だから、現在そういう百年間の教育の結果、近代ヨーロッパ精神の矛盾というものを日本もやつぱり受け継いで、その矛盾というか、その破綻が現在あらわれているのではないかと思います。

従来、日本には仏教というものがあつて、それには慈悲という精神がありました。これは、いまことばとしては、無慈悲な政策とかいうふうな形で慈悲ということばが残っておりますけれども、日本精神の中には慈悲という精神があつたと言えるのではないかと思います。

だから、博愛精神がないとおっしゃいますのは、ヨーロッパ近代精神の破綻の結果が、実は博愛というものをなくしたのではないかというふうに私は思うのですが、いかがでございましょうか。

人見 私が先ほど、博愛がないと申し上げましたのは、これは必ずしも日本のことばかりではなしに、西欧でもまさに自由と平等というのは非常に強調されて、博愛という問題はあまり議論されなかつた。しかしこれは今後においてかなり議論されなければいけないのではないかとということで、日本の社会でも全面的になかつたという意味で否定したつもりはないのです。

ただ、それが今までは、そういう博愛精神のある人たちの偶発的な行為で行なわれてきたけれども、そういう偶発的な問題だけで処理できるものではないので、もつとみんなが広く持つてほしい心の問題ではないか、という形で問題を提起したつもりなのですが、説明がたいへんに行き届きで申しわけございませんでした。

司会（三枝） この問題につきまして、大久保先生はいかがでございましょう。

大久保 私あまり仏教のことは知らないのですが、要するに、日本における博愛の精神、あるいは慈悲というような精神は、個人の次元にとどまっている。つまり、社会の中での慈悲のあり方というものが全然考えられていない。

そういう点では、日本のそういう行為はきわめて情緒的で、自分の自己満足の中だけで処理されているという点があると思うのです。そういう点からみると、日本の社会というのは、まだ成熟期に達していないというふうに私は考えています。

会議員（B） 第4分科会の久保先生に質問いたします。

横浜では、皆さまご承知のように、ただいま第2回アジア卓球大会が開かれております。アジアの、一口で言えば発展途上国の方々が多く見えておりますけれども、私はそこに善意通訳として、まあ無料奉仕通訳としてお手伝いしてまいりました。その方たちとこの何日間か一諸におつき合いをしてまいりまして、つくづく感じたことは、いま大久保先生がおっしゃったように、日本的価値観は世界の中で特異な存在だということを感じて、私はたいへんショックでした。私は私なりに、去年から東南アジアの方々をわが家に招いたりして、ほんとうに善意の奉仕といえますか、ささやかな市民外交をしてまいつたのですけれども、そういうことは、私の力ではとてもとても及びがつかないところに、また、いくら努力しても限りがないような、虚無感みたいなものにおそわれることがあります。そういうことを具体的にどのように解決していったらよろしいでしょうか、お伺いしたいと思います。

大久保 日本がコスモポリタンの社会になるということについての、特効薬はないですね。

それは、女性問題についてもまさにそのとおりだと思います。女性問題を何年やつてもまあ同じとは言いませんけれども、それほど変わらないという印象は、女性問題解決のための特効薬はない、というように考えております。大体、女性の問題が登場してきたのは終戦後ですね。それから日本人が解放されたのは明治以後、その差がある限り、なかなかこの解決はむずかしいわけです。ましてや日本の社会全体が変わる、あるいはそれに対する特効薬は何か。これは非常にむずかしい。

しかし1つ言えることは、日本の社会が外から圧迫を受けたとき、外圧がきたときに初めて大きく日本の社会は変わる。みずから予測して変えるという作業は、日本人に非常に不適当であります。

そういう能力はきわめて乏しい。したがって、石油危機とか、あるいは非常に大きなショックが日本にやってくる、そのとき初めて日本人全体が変わる。したがって特效薬は、外からの外圧を待つ、というふうに考えております。

司会（三枝） 茅先生、あるいは見田先生、いかがでございますか。

茅 いまの久保先生の話は、私もたいへん面白いお話だと何つたのですが、実はちよつと関連しまして、私も非常に感じたことがあるわけです。

それは、ヨーロッパにしましてもアメリカに参りましても非常に感ずるのは、先ほど久保先生が言われたことですが、日本の文化の輸出がない、心の輸出がないという話なのです。その最大の理由は何にかと申しますと、私は、われわれが現在つくっている文化と、われわれが日本文化と称してきたものは、あまりに違うということではないかという気がいたします。

たとへば国連の場合に、中国が加入したときに、非常に中国は関心をもつて迎えられた。それは、確かに現在の世界の情勢の中における中国の意味というものは、非常に大きいからにはかならないのですけれども、私の知人たちの話を聞きますと、中国の持つている偉大な文化、そしてそれを彼らが自分たちの中に繁栄させていまの国をつくっているという意識が、非常な尊敬の対象であると言うことを言っているわけです。

日本の場合、確かに日本の文化というのはございます。外国にも日本文化を示すための、たとえばさまざまな日本文化館とか、そういうものはあるのですけれども、現実にはわれわれが外国で見聞しております日本の行動と日本の文化とは、まるで差があるわけです。あたかもよその国であるかのようです。したがって、かりに外国人が日本文化館というものに参りまして、日本の文化を眺め、そして、これが日本かとかりに思つたといえしましても、おそらくその次の瞬間に、新聞の紙上、あるいは商社の人間の動きでみる日本というものは、まるで別な国になつてゐるわけです。

したがって、われわれ自身ももし世界の中で1つの確固とした地位を確保するとするならば、自分たちの持つている行動と、自分たちの見せている文化というものの差をできるだけ縮める。それが私は一番必要ではないかと思ひます。

それがはたして、過去の日本文化の持つている方向にわれわれの行動を向けるべきなのか、あるいはその逆なのか、この辺はたいへん議論が分かれると思ひますけれども、いずれにしても、この2つの間にある大きな遊離が、現在の世界の中における日本の地位の低さをつくっているのではないか、

という気がしております。

司会（三枝） それでは次のご質問に移りたいと思います。

傍聴者（A） 大久保先生にお伺いします。

先ほど先生が、日本の教育は失敗であつたとおっしゃつたことは、私も、狂乱物価のあけくに議會でいろいろつるし上げに会つた企業のトップレベルの人たちを見まして、全く同感でございました。

日本には、残念ながら社会教育の場というのがないのです。教育が失敗であつたというのは、学校教育も家庭教育も含めてのことかと思ひますけれども、社会教育の場を、ここにいるお母さんたちや次代をにらむ若い女性が、どういうところに求めたら博愛とかそういうことを考えられるようになると思われますのでしょうか。

大久保 日本の教育というのはさつき申しましたように、後進国型の教育としては非常に効率が高いわけです。要するに字も書けない人々を、基礎教育において字を覚えさせ、算教を習わせる。そういう非常に多くの知識を詰め込んで、日本はスピードで先進国へかけ上がつてきたわけです。そういう例はほかの国にはないわけです。そして、日本の国がGNPをこれまでにしたのは、そういう優秀な労働力が教育によつて提供される、ということからくるのだらうと私は思ひます。

しかし、大体社会というのは、その目的を達成したときに、その目的を達成した手段というのは捨て去らなければならない、ということがあるわけです。つまり、日本が先進国になつたときは、それを達成した手段は捨て去らなければならない。日本の教育は、まさに成功したがゆゑにその教育のシステムを変えなければならない、というふうに私は思ひます。

ところが、日本の教育界、あるいは教育界自体というのは非常に保守的なところであります。つまり、現在の価値、あるいは現在の知識を教えるということ自体が非常に保守的なことですから、日本の教育全体が保守的であり、その保守性は上にいくほど高い。つまり小学校教育よりも大学教育のほうがその後進性を非常に持つてゐる。

それから、目的が達成されたときに手段が捨て去られるという背景には、もう一つ、技術革新ということがあります。技術革新によつて知識が陳腐化するといひますか、暗記そのものはあまり重要でなくなつたわけであらう。

そうすると、一生懸命詰め込んだ、つまり受験地獄で詰め込んだ教育の材料は、社会に出てから全く役に立たない。つまり、判断能力を喪失しているし、創造性を全く欠いている。そういう教育にいまそしんでいるわけです。つまり、そういうように教育のシステムがなっているわけです。

さらに、国際化の時代において、日本の教育は決してコスモポリタンの感覚で教育されているわけではない。そういうわけで、日本の教育というのは非常に時代おくれになりつつあるわけです。

とすると、新しい教育はどういうふうにやっていくかという、私は教育そのものの後進性というものを基盤にしては、あまり役に立たない。つまり、社会のほうが教育界よりも進んでいるという状況になつたときには、子供たちをなるべく社会に近づける。いままでの教育は、社会があまり不潔だから学校だけに隔離して教育しよう。つまり学校の先生だけに頼ろうという気があつた。

そうではなくて、今後の教育というのは、学校は学問を教え、社会はその社会的な正義感とか、社会的な貢献というものを教える。そして家庭は情諸を教えるというようになる必要があると思うのです。学校では、社会的な貢献とか、社会的平等性、社会的な正義感というものを知識で教えられますけれども、実際に経験しないので役に立たないのですね。

それから情諸というのは、管理社会、つまり高度な産業社会における1つの社会ですが、そういう中では、合理性が尊ばれると皆さん思いがちですが、しかしそういう社会になると、合理性とか効率よりも、はるかに情諸のほうが重要になってくる。この現象は、つまりないものほど尊く見えるという、人間社会の1つの重要な価値観であります。したがって今後は、家庭において情諸を教育することが非常に重要になる。そのころお母さんが情諸があるかどうかというのは非常に問題ですけれども、しかし情諸こそ家庭教育のエッセンスであるというふうに私は思います。

そういう意味で、いまのご質問のお答えになるかどうかわかりませんが、日本の学校のシステムは急速に変えられなければならない。学校のシステムを変えることによつて、新しい日本の理想像というか、人間像というものをつくり上げるし、自然とつくり上がっていくだろうというふうに思っております。

傍聴者(A) そのシステムを変えるということですが、そのシステムが出てきた根本的な思想とか宗教性とかいうのはいかがなものでございましょうか。

大久保 たとえば、いろいろ言い方がありますが、私が具体的に研究しているのは、学校5日制の問題です。学校5日制を早く実現して、学校から子供をなるべく離して家庭に置いておく、

そして社会に出す。そのことが社会性を増し、家庭の情諸を増し、学校教育という欠陥をなるべく少なくする道である、というふうに思います。

傍聴者(A) 社会教育の基本というのは何でございましょうか。

大久保 私の考えですけれども、社会の中で生きていく上で、平等とか社会的正義感、社会的な公平性というものがどういうものであるかということを感じ、それに対して自分の意見を持つということですね。

傍聴者(A) ありがとうございました。

司会(三枝) 大久保先生のお話でも、教育における婦人の役割は、たいへん大きな問題をこれからますます含んでいくと思いますので、大いに討議いただきたいと思います。

会議員(C) 先ほど情諸ということができましたが、私は、日本の国は世界のどの国よりも一番賢い人種であり、それから技術面でもすばらしい国民であると心から確信を持っております。けれども、ジャカルタで起きました反日デモにはひどく心を痛めつけられました。

やはりいまの日本の国民1人1人に一番必要なことは、心の問題であると私は思うのです。この心の問題を解決しないことには、私たちの国は滅んでいくと思うのです。

そのことにつきまして、やはり豊かな心、暖い心を育てるためには、豊かな自然環境が大切だと私は思うのです。けれども、いまの日本の国は人口が膨大にふくれ上がる中におきまして、山の頂までもたくさん家が立ち並んで、ブルドーザーで切りこわされてしまっております。

そこで、私がお聞きしたいのは、人口問題でございします。

人口問題は非常にむずかしい問題ですけれども、結論的に考えますと、この問題を解決しないことには、日本のほんとうに豊かな心のある人間がつかれないと思うのでございします。この点について茅先生にご意見をお聞かせいただきたいと思います。

茅 いまのご質問ですが、実は、私の意見はおそらく逆だろうと思うのです。

逆だという意味は、人口問題は解決できないということで、それを解決することをほかの解決の手段にしている、というふうに考えております。

その理由をこれから申し上げますが、日本の人口というのは、確かに1億という非常に巨大な量になっております。しかし、実際問題として、日本の人口がこのあとふくれ上がるのをはたして押えることができるか、という問題が出てまいります。

現在の人口の平均的な成長率は、大体1%程度ですけれども、実はこの伸びというのは、特別に子供をたくさんつくっているから伸びているわけではないのです。特に40代の、あるいは30代の方は自分の家族をどんどんになるとわかると思うのですが、大体のお宅が子供2人なのです。現在数字で申し上げますと、日本の1家族当たりの子供の数というのは、全部何んでもかんでもひつくるめまして、大体2・09ぐらいです。

これはどういう状況かといいますと、両親から子供2人ができるというパターンが大体定着していて、この形ですと、人口の年齢分布というものが一樣だったら、人口はだいたい一定になる。むしろ多少下がりぎみになるという状況なのです。

この状況で人口を減らす、減らすというよりも、成長率を落すということはいへんなのです。

簡単な例を申し上げますと、ひのえうまというのがありましたね。5年ぐらい前でしてでしょうか。あのとき計測した数字があるのですが、確かに子供の数は減ったのです。2・09という数字が、大体1・59ぐらいまで落ちたのです。そこで単純な計算をしまして、その1・59という数字で今後ずっと続けようとしたら、つまりみんなひのえうまばかりだったとしたら、何年ぐらいで人口が増加するのがとまるとお思いですか。実は、大体20年ぐらいかかるのです。

つまり、日本の人口の増加というのは、若年層が非常に多い。戦後のベビーブームといった形でのその遺産が現在にきているわけで、現在、実は子供の出生の数が世界的にみて一番安定している国が日本なのです。

こういった状況ををおかつやめて、むしろ人口をできるだけ成長させないとするならば、今後子供をつくるのはすべてやめなさいというのに等しいことになります。社会的なデフレーションといった点から考えますと、私はこれは不可能に近い要求だと思うのです。ですから最近、人口の適正量、たとえば日本は食糧の自給ということを考えれば、7,000万が適当であるとか、6,000万が適当であるという話があるわけですが、

私自身はこの議論はナンセンスだと思っているわけです。何がナンセンスかと申しますと、いまわれわれがこの国土の上に1億の人口をかかえているわけです。これを殺すことはできないわけです。これだけの人間が、いかにして幸福な生活をつくるかということに努力すべきであつて、それを現実

の問題として減らすということは、実際にできないわけです。

だから、人口問題というのは非常に世界的には大きな問題ですけれども、日本の場合には、人口にたにか手を加えるよりも、その人口をいかにして養うかという形に問題を展開するのがほんとうの考え方だ、というふうに私は信じております。

議員（C） ありがとうございます。よくわかりました。

司会（三枝） それでは、次の質問に移りましょう。

議員（D） 大久保先生にお願いいたします。

私は、北海道の大雪山の麓で酪農をしております。

先生は、高令化社会、高学歴化社会がますます悲劇が多くなるとおっしゃられました。私もその悲劇の中に入る部類ではないかと考えまして、酪農の牧草刈りをやつたり、牛追いをやつたり、乳しぼりという重労働がもうできなくなる年令ですので、それで何か楽しみをやりたいと思いました。

それで、木彫りを覚えたいと思ひまして、そういう学校もありませんので、訓練校に入つてまず仕事を手習いし、そのあと木彫工場の工員見習になつて、毎日仕事を半日づつ覚えることになりました。

そこへ行きまして驚いたことには、工場には休憩時間がありますけど、休憩時間のベルは要らないのだ、ということです。そこには、50人ほどの従業員がおりまして、機械を動かしている若い男の方たちは、塗装仕上げといひまして、熊をきれいに塗りあげ磨きをかけるという仕事を日給でいたしております。その方たちはちゃんとお昼休みもとりますし、間の休憩15分もとります。けれども、私の入っているところは、のみを持つて手彫りをするところで、板にめのこの顔をのみで彫つたりするところですが、それは請負いという仕事になります。初めの3カ月は、1日1,010円の見習いで、どんなに仕事ができなくても出面賃というのをいただけますけれど、3カ月過ぎますと1個幾ら、1枚幾らということになります。

そこに働きに来ている方は、みんな私たちと同じような主婦です。この物価値上がりについていけない中小企業のもつとも小さいところに勤めている家庭が多いものですから、子供たちを幼稚園や保育園に出したあと、奥様業としてじつとしているわけにはいきません。それでみんな働きに出てきて、その請負で1個1尺ぐらいの熊をつくりますと、350円いただけます。市販で5,000円ぐらいに

売っております。

そういうような仕事ですから、お昼御飯を食べてしまうと、控室にテレビはありましても、テレビを見る暇もなくすぐ仕事にかかります。休み時間が15分ずつ午前午後とありましても、もう休むのが惜しくて、それだけのみを動かしてお金にしたいというのが本音なのです。そうやって仕事をしております。

その方たちが、婦人会議に私が出るといいましたら、私たちはこの1日、1時間、10分が惜しくて仕事をしているが、週休2日制というような時代が遠からずくということになったときに、私たちはどうなるのだろう、そういう低所得層といいますか、そういう層が週休2日制の時代になったときに、その暮らしが人並みに月給をもらっている方に追いつくのか、それともそういうような方たちに取り残されてしまうのかどうか、それを聞いてほしいといわれましたので教えていただきたいと思います。

大久保 最近の労働者の傾向を見ますと、確かに賃上げの要求は今後非常に高まってきます。しかし、金だけでは解決つかないですね。昔は飢えていましたから、その労働者にパンをやれば勤労意欲は高まったわけです。しかし、いま飢えて死ぬ人はほとんどない。そういうときに何をその労働者にやろうかということは、非常に大きな問題です。何となく、倦怠感と索寞とした感じを持って機械に向かつて仕事をしている人たちに、しかしそれで空腹ではないそういう人たちに、何を与えようかということが、いま日本の産業界における非常に大きな問題です。

今後私は、ストは必ず長期化し、多発化するというふうに思っております。そういうストの多発化、あるいは長期化ということに対して、いずれ取締しをしなければならないし、そのために労働組合幹部はいろんな交渉をしなければならない。

そういう行為に対して、最近の青年労働者は非常に不満を持っている。つまり欺瞞的行為だというふうに警戒するようになっていきます。

ということは、労働組合の幹部の人たちはかなり貴族化しつつあり、労働組合の幹部でさえも労働組合の底辺に対して目を向けていないということでもあります。ですから、そういう労働組合が次第に頼りにならなくなる事態が今後生じるだろうと私は思うのです。そういうつた中に労働者の流動化現象が将来起こってくるだろう。流動化が起こればその現象はかなり変わってくる。

つまり、日本の社会全体が向上すると、働く場所が非常に多様化してくる。そこでは安い給料では働かなくなってくる、というように、人手不足が根本にないとその現象の解決はむずかしいわけです。そういう労働の流動化によつてそれは必ず解決する、そして、将来産業が機械化すればするほど、

必ず週休2日制はやつてくる、というふうに私は確信しております。

司会（三枝） 見田先生、いかがでございましょうか。いまの方のように生きがいというようなものをとめて仕事にはいつていらつしやるけれども、その仕事は非常に悪い条件のもとで働いていらつしやる、その人たちの問題をどういうふうに考えたらいいかという、たいへんむつかしいご質問だと思いますけれども。

見田 先ほどから5人ほどの方々からご質問があつて、その方々のご質問がみんなつながってくるだろうと思うのですが、一番初めの方が人見先生にご質問になつたことについて申しますと、日本文化の中に博愛がなかつたのではなくてあつたのではないかというご意見については、私も本当にそのとおりだと思うのです。

人見先生のおつしやつたこともやはりそういうことで、つまり、日本文化の中になかつたというのではなくて、ヨーロッパも含めた近代社会の問題として、近代社会がそういうものを阻害してきたのではないかというお話として、私は承つたのです。

ただ問題は、これはあとで3番目の方のご質問とかかわつてくると思うのですが、そのことが確かに日本文化、あるいは個々の日本人の心の中にあるけれども、現在の日本の社会の原理として、あるいは政策として具体化されていない。そういうことが一番問題だと思うわけですが、たとえば、私さつきちよつと水俣のことにふれましたのは、水俣のことで自体をここで話したいのではなくて、そのことがいまの日本の文明とか、あるいは物と心を考える場合のいろいろな問題の集結点、あるいはそれがひしめいている問題だと思いますので、それを1つ例にとつて考えてみますと、たとえば水俣のようないろんな悲惨な状態が起つてきたその原因といつたことは、企業あるいは産業のほうで行なつていたわけで、それに対してもともと被害者であつた漁民の方は、そういうことに対してもつと前から心配していたわけです。

その場合に、本来の日本文化というものを自分たちのものとして代表していたのは、漁民たちの方で、博愛というものを阻害するような人間自体の破壊をもたらすような原理で行動していたのは、産業の方なのですが、産業というのは日本文化本来の形を代表していたのではなくて、むしろ近代文明、そういうものを代表していたものだろうと思うわけです。

ですから、いまいろいろな方のお話に出ましたような問題を解決する原点のうちの1つは、日本文化がだめだということではなくて、むしろ反対に、近代あるいは現代文明の中で阻害されてきたいろいろなものを回復する、そういうものの原点が、実は日本文化の中にあつたのではないか、ということ

とが1つあると思うわけです。

その場合に、人見先生のおっしゃったことでたいへん重要なことだと思いますのは、博愛のことともつながってくるわけですが、産業革命ということによつて人間がかなり解放されてきた。しかしこれは、一般的に言えば、産業革命によつてほんとうに解放されたのは男だけであつて、女性は解放されなかつたと思うわけです。

それはどうしてかといいますと、産業革命によつてつくられてきた近代社会の原理は、基本的には生産性の原理であるし、能率の原理であるわけです。そうしますと、これはどういうことになるかというと、学校を出て職場に入つて、1年か2年たつたぐらいの方々はよくおわかりになると思うのですが、働く女性というのは、いまの社会の中で、男になるか女になるかということを迫られるわけです。

どうしてかといいますと、これは婦人会議などでも戦後からずつと問題になつてきた、同一労働同一賃金ということがあります。この女性も同じ労働をして同じ賃金をもらうということは、確かに女性の解放にとつて1つの重要なステップになつてきたらと思うわけです。

ところが、そのことがいま現在ではかえつて、ある意味では差別の根拠にもなつてきている。ということは、同一労働同一賃金にしますと、女性というのは当然育児の問題や生理の問題がありますし、そうすると、事実上は同一労働できないから、当然賃金にも差別があるということになつてくる。もしそうではなくて、女性に同じ賃金をよこせということになりますと、今度は経営者のほうで女性を雇わない。これは実際にどこでもあります。たとえば、家庭裁判所や学校の先生でもそうですが、試験を受けた男と女の人のうち、どつちが合格点が低いかというと、男の方が低いわけです。しかし女の方はよほど優秀でないととつてもらえない。男の方はあまり優秀でなくても、男の応募者があつたということととつてもらえる。

それはどうしてかといいますと、経済原理から言えば、とるほうとしては当然なのです。つまり女の方はすぐに退めたり、あるいは生理休暇などをとつたりします。ですかなるべく男の方をとりたいというふうになる。そうすると、同一労働同一賃金ということを逆にたてによつて、女性が自立から差別されてくるということが実際に起こつてきている。

人間の社会がつくられていく中には、2つのことがどうしてもポイントになるわけで、1つは、人間が生きていくためにいろいろな物をたくさんつくらなければならない。もう1つは、人間自身をたくさん、しかも立派につくらなければならないということです。

資本主義社会の基本的な原理というのは、そのうちの物をつくるということだけが人間自立の根拠である。つまり商品として、むずかしいことばで言えば、交換価値になるもの、つまり売れるものをつくるという人間だけが経済的に1人前の人間であつて月給がもらえる。そうでないと社会的な自立

した人間とは認められないという原理があるわけです。

そうすると、女性が自分で経済的に自立しようと考えて会社に入りますと、お前、男になるのか女になるのかと迫られる。つまり、ちゃんと1人前に働くんならば、いわば家庭というものはそこそこにして、ちゃんと男と同じように、子供も実際にはつくらないように、とは会社には言いませんけれども、実際にはつくれないような条件のもとで、男並みに働きなさいということになつて初めて自立性が獲得できる。

しかしながら、そうではなくて、女性の本来持っている、いわば子供を生み育てていくということをやろうと思えば、経済的に自立できないから、現在の社会の中で自立できないということになつてくる。つまり、女である限りはいまの資本主義社会の中では自立ができない。自立しようとすれば女性であることから阻害される。そういつた問題をとらえていかないと、婦人問題というのはどうしても堂々めぐりするだろう、というように思うわけです。

司会(三枝) 働く女性の問題、働く女性の置かれている労働条件とかいろいろな問題は、非常にむずかしい個々の問題があると思いますので、ここでズバリご質問にお返事することはできないかもしれませんが、こういう機会に、男の人と同じように女の人にも働けるような条件づくりを、女の人たちが、それぞれ自分だけがいいというのではなくて、みんなで協力して、何とか条件をよくしていくことに努力していくより仕方がないのではないかという感じがいたします。十分に満足できるお答えがこの会議で得られるかどうか、なお分科会でもお話をお出しいただきたいと思います。

では最後にもの1つだけご質問をいただきたいと思います。

傍聴者(B) 勤労の美德ということを信じてきた者が 大久保先生がおつしやいましたが、この点についてお尋ねしたいと思います。

私は農業者ですが、勤労者の皆さんが、週休2日あるいは3日というようなものを求めるということがどうしてそれほど切実なのか、ここで問いかけてみたいと思います。私は、いままで勤労の美德と思つてきたようなことは、これはいわば見せかけの場面もあるのではないかと思うのです。それは勤労者がみずからの労働によつて物を生産することが、すばらしい喜びであり楽しみであるというような労働の評価が、現在の経済機構のなかではたしてされてきたのかどうか。

これが非常に大きな、しかも大切な問題ではないかと思うのです。みずからの労働が正しく評価されるとすれば、そこで生産されるものは、その人が精神をこめてつくり上げそれこそ立派なものがつく

り出されて、それはやがて消費の場面でも消費者を十分に満足させる製品ができるわけです。

ところが、現在のような経済機構の中では、勤労が美德どころか、むしろそれは苦痛の場面さえあるのではないか。また、そのような機構の中では、労働は商品性を持たなければならないわけですが、商品であれば、商品としてみずからの労働が正しく評価されることが当然であろうと思うのです。

しかし、はたしてその提供する労働力というものが、それほど正しく評価されているのかどうか。労働の内容というものが正しく評価されて、それらしい賃金が支払われるのであれば、そこに当然の姿として介在する家族、あるいは配偶者が、内職あるいは副業までしなくても済むような世界が生まれるのではないか。そのときこそ、必ずしも週休2日にならなくても、現在の週休1日であっても、満足する世界が生まれるだろうと私は信じていたのですが、この点について教えていただきたいと思います。

司会（三枝） いろいろな問題を含んでいるご質問だと思いますけれども、時間がございませんのでくわしくはそれぞれの分科会でご討議いただきたいと思います。

大久保先生、一言でお答えいただけたらと思います。

大久保 週休2日制は必然的にやってくるし、都市の労働者にとつて、もつとGNPが上がれば3日制になるだろう、というふうに思います。

週休1日制の社会というのは、初期工業化社会か農耕社会でありまして、そういう労働とまったく違つた技術革新の社会では、労働の密度が非常に高く、週休2日制にならないと労働者自体のからだを持たなくなるといことが、実際の調査ではつきりしております。要するに、勤勉は美德だという価値観のみで今後の社会が生活できるかという、私はできないということが結論です。

司会（三枝） どうもありがとうございました。

それではこれでシンポジウムを終りたいと思います。

御協力どうもありがとうございました。

分 科 会

第 1 分科会

資源と生活の問題を中心として

リーダー 茅 陽 一
進 行 山 東 せつ子
(北海道大学農学部講師)
記 録 加 賀 谷 恵 子

第1分科会は、婦人会議員の年齢構成が比較的若く、20才～50才までの14名中、20代が5名である。ほとんどが都市在住者で、主婦専業が多い。このほか、特別会議員として4名の男性会議員が参加した。その職業は会社員、団体役員、会社社長である。

I 節約とはどういうことか、それは私たちの価値感とどう関連するのか。

討論を展開するにあたり、初めにリーダーより資源と生活についての説明がなされ、資源を節約して使うということは、私たちの価値感とどう関連するのか、またそれと教育のあり方がどのようにからんでくるのかを考えてみようという問題提起があり、それをふまえて討論に入った。

まず、家庭での節約のあり方とその意味についての意見が出され、家庭での節約は長期でなければ効果がないこと。したがってそういう視野に立って、日常不断に自分たちのできるところからやっていくことが大切であるという発言が多く、石油節約の政策など、外から押しつけられた節約は望ましくないという意向が強かった。また、節約という意味についても、節約とケチをともしると同義語と考えがちであるが、節約とは合理的ということであってケチとは違うと考えた。あるいは、物すべて節約と考えたり、苦痛を伴うものとしてやるのではなく、ケースバイケースで、あくまで心の豊かさを失わないよう対処していきたいなど、節約という意味をはっきり見きわめ、あくまで自分たちの主体的な生活条件として節約をとり入れたいという意見でまとめられた。

この問題について、20代の会議員からは、物のある時代に生れ節約ということについての問題意識がまだないという声が出され、他の世代からも、20代30代の若い主婦は、豆腐が値上りしたとき、容器を持参すれば安く買えるのにそれをせず、相変らずパックされたものを買って

いく。いまの若いお母さんは物を簡単に子供に与えすぎるなどの意見が出され、世代による価値感の相違が出された。

それらを通して、自分の欲望が正しい消費に結びついているかどうかを問い直さなければという意見も出され、「消費は美德」という価値感に対する反省が出された。そして自らの価値感として、なんでも「人がやるから」と購入することをやめ、本当に必要かどうかを見きわめて購入するという姿勢の確立が必要なことや、物に対する価値感を外部から押しつけられるのではなく、もっとそのものの存在理由を考えて、そこから自分の価値感をもつことが真の節約になるのではないかという方向が出された。

以上をふまえて、節約とか無駄の価値感をどう子供に伝え、教育するのかという問題が出された。紙不足のとき、紙を工夫して使う子供たちの表情がとても生き生きしていて教えられることが多かったという発言をはじめ、ナイフでエンピツも削れないというように安易さに馴れきった子供がふえてきている中で、逆に不便さの中から創造性を生み出させる努力をしている。子供のノートの使いかたをみて、自分たちが教った米に対するしつけなどと比較して、物にも心があることを子供と話しあった。母と子の話しあいの中から無駄なものを買わないようにするとともに、その中から物を大切に使う姿勢をつくりあげている。自分の使っていた人形やセーターを改良して子供たちに与えたときの反応として、そこから子供たちが物を大切にする価値感を感じとっていくなど、家庭での日常的な会話や態度の中から自然に節約や、無駄の排除を身につける努力をしている様子が出された。

Ⅱ 省資源への対応として消費者と企業はどうあったらよいか。

資源消費の伸び率に技術の進歩が対応しきれないというアンバランスに対処する必要から、今後どうしても経済成長を落とすということが必要になってくるが、それに対する今日までの企業のあり方として、過大装飾の子供用机、冷水器つき冷蔵庫など高度成長を前提とした企業側の態度は、今後節約という観点から改めてもらう必要があるという意見が出され、それに関連して、西ドイツで暮らした経験をもつ議員からは、80年前のミンがいまだに使われ、その部品も取りかえられるが、日本はモデルチェンジが盛んで、店も古いのを修理するより新しいのを買った方がトクとすすめる。日本の経済成長は、短い耐用年数とひんばんなモデルチェンジの上に成り立っているが、西ドイツは長もちする製品を作りながら高度成長をとげているという発言がなされ、又消費モニターを経験した議員からは、電気洗たく機などの耐用年数は5年で、ちょっとした修理も部品がなくてできないという消費者の苦情が多い、耐用年数の拡大、部品の確保、規格化という三つの注文を何年となく出し続けているが効果があがらないという発言も出された。

したがってそこから消費者側の態度としても、そういう外部的条件に対して個人のつぶやきに終るのではなく、消費者の声を大きくして企業側に改善を訴えていく必要があるのではないかという意見が集約された。

さらに生産者から消費者間への商品流通を考えた場合にも、その中に複雑な流通機構が入ってきて安い商品を手に入れにくくしているの、その合理化が不可欠であるという声が出され、そこから消費者がもっと商品知識や流通経路など勉強して、企業のペースにのせられない態度の確立が必要ではないかという意見も出された。

そして、それらの無駄を省くためにも消費者はもっと強くならなければならないが、この強い消費者をどうつくったらよいのかという点について、リーダーからは、「消費者団体の力をより大きくしていくこと、そのうえで企業側とのより多くの接触の中でお互の異なる立場を理解してもらうことが大切」という助言がなされた。さらにそれらの消費者運動をすすめるにあたって、各地域の消費者センターがその役割を果たし十分活用されているかというリーダーの間に対しては、PR不足や距離的に遠かったりして、消費者運動を十分バックアップしてくれるまでには至っていないという実態も出され、そうした中で専門的知識をもつ学識者の参加を消費者運動に望みたいという要望も出された。

Ⅲ 省資源への対応としてリサイクリングをどう進めるか。

「省資源への具体的対応として、今後は商品を単に使い捨てるのではなく、冷蔵庫、洗たく機は再生して使うことも可能ではないか。その方向をもっと大々的に考える必要があるのではないか。そしてこのような回収を考えたときの生産の体系はかなり今までと事情が異ってくるはずである」というリーダーからの助言があり、ではこの回収をどうやってやるのか、その手間は果してどうかという点に話が進められた。

そうした場合、中国では、プラスチック、ガラス、金属、台所のゴミなどを全部回収して再生しているという実情が紹介され、日本では果してこれが可能かということについて、回収は企業が強力にやらなければならないということのみならず、一般消費者も相当進んでやらなければならないのではないかという指摘がなされた。その場合、ゴミにしてももっと空缶やプラスチック等素材別に選別して回収がなされる必要があること、商品に素材表示がはっきりなされていればもっと簡単に消費者が選別でき協力しやすいが、この点で企業がもっと責任をもって回収する努力が必要だという意見などが出された。

消費者の家庭では、燃えるゴミは焼き、生ゴミは埋めたり養豚屎に回収してもらうなどすでに各々工夫がなされている様子も発言された。

しかしその中から、公害発生の原因として回収が義務づけられている場合はわかるが、資源再利用という形で回収を義務づけるのは難しいのではないかという疑問も出され、リーダーはこれに対して「今までは難しかったが、今後は資源利用、省資源という観点から政策的にも回収が必要になってくる」という助言がなされた。

第2分科会

文明と生活の問題を中心として

リーダー 見 田 宗 介

司 会 伊 東 淳 子

(北海道女子短期大学講師)

記 録 山 口 栄 子

第2分科会は、23才～60才まで、会議員の年齢幅は広いが、35才以上が大半を占めた。主婦専業は2名のみで、他は農業の4名をはじめ、教員3名、公務員、自営業が各2名、看護婦、新聞記者などさまざまな職種がみられた。

1 現代文明の中で「物」と「心」はどうなっているか。

初めに、会議員がどんな問題をもって会議に臨んだかを出しあい、そこから討論の柱をみつめていこうということで話がすすめられた。

すなわち、日本の婦人は、経済成長の中でより自由が与えられたかのようにみられているが、その実態は、物の豊かさにふりまわされて心の豊かさは逆に失われている。若者の結婚観にしても、単に結婚というものにあこがれ、結婚生活の内容には期待がもたれていないなど、豊かさを量でのみ判断する風潮があること。また、手作りブームだが、感覚だけで本当の手作りが失われている。人間の健康のため、自然食をもっと大事にしてゆきたい。豊かな自然を守りたい、そのために農業など公害についてもっと考えていきたい。農村でも住宅構造が変わり、いろいろが消えるという変化の中で、炉ばたの心あたたまる話し合いが失われてきている。農営上も狭い田畑に機械を入れ、農民はその借金で困っている、もつと主体性をもちたい。農産物の暴落など農民が農業に愛着をもつていくことができない、農民の労働がもつと正しく評価されるようになってほしい。文化の創造のにな手か商業主義によつては本当になされえないことへの反省として、本当の文化を伝承していくためにはもっと地方文化を高めていくことが大切ではないか。働く女性がふえる中で母と子の心をつなぐ場が少くなっている。働くことと育児についての価値感が問われているときではないか等々。いつも「消費は美德」といわれた高度経済成長の中で大きく変化してきた自分たちをとりまく生活環境とその価値感についての悩みと反省が、それぞれの立場から共通して出された。

そしてその中から、子供たちに心豊かなものを伝えていくためには、母親としてもっと物事を客観的にみていくことが必要なのではないか。子供たちのための社会を母親はつくってやらないのではないかとの反省もなされ、リーダーからは、「日本文化の発展の可能性は、これを生かすか殺すかという今後のかかわり方が問題である。社会をつくる柱は、物をつくることと人間をつくることであるが、現在はそれが、個人の家族や人類のエゴイズムによってなされている、もっと相手の立場になってものを考えていくことが大切ではないか」という助言がなされた。

Ⅱ 子供をどのような環境でどのように育てるか。

文明の問題を日常生活の中からどう考えていくかということの中で次代を担う子供の育て方や環境などについて話が出された。

まず、母親としてどういう子供を育てたいかというイメージが出しあわれた。20代の未婚者は、いまの子供は創造性に欠けている、自分で考えることのできる子供、個性のある子供に育てたいと語り、看護婦の仕事のかたわら子供たちに童話を教えているという議員は、自然や人間すべてを愛する心をもった感受性豊かな子供を育てたい。また教師である議員からは、視野の広い子供に育てたいという意見などが出された。

その中から、それではそういう子供に育てるためにはどうしたらよいかという問題として、育てる側の母親の接しかたについて、母親自身が子供にあたたかい気持ちで接するとともに、子供の個性をみつけそれを尊重すること。子供に主体性をもたせ干渉しないこと。と同時に、いまの母親は厳しさが足りないので、悪いことは悪いとはっきりいう教育をする必要があるのではないかなどの意見が出された。

また、働く母親の経験から、幼児期保育所にあずけたことが、結果として子供に主体性をもたせることになりよかったのではないかと、重要なのは子供に接する時間ではなく、その接しかたである。という意見や、子育てを終った議員からは、本当は子供を育てるのではなく、子供に育てられるのではないかという意見も出された。

リーダーからは、「信念をもって子供を育てること、しかし同時に、親の考えが絶対の基準ではないということである。子供を愛する心は誰しももっているが、問題はもししたら愛することになるかということを考えていく必要がある」という助言がなされた。

さらに、子供を育てる環境として、子供にとって父親はどうしても必要なのかという問題が出され、その必要を考えて再婚したという発言や、夫を亡くしてもそこから母子ともども非常に主体的になりなんとかやってきたという発言を軸にして、さまざまな議論が展開されたが、結局、子供にとって両親揃っているのは理想だが、父親がいなくてもよい子がいるように、それぞれの

おかれた環境によって異なるので、一概にはいえないのではないかという方向でまとめられた。

Ⅲ 育児と女性の生き方はどうかかわっているか

ついで、子供を生み育てる側の女性の生き方が問題になった。

まず、子供にことの善悪を教えるときどんな価値感をもって接するのか、その母親の価値感が問題であるということから、子供以前にまず自分を育てることや女性の主体性や生きかたが重要になってくるのではないかという話が出され、そこから、それらはどうしたら得られるのかということについて、多くの経験や意見が述べられた。

特に、女性が主体性をもつにはまず経済力をもつことであるという意見が多くだされたが、発展して、母親が働くことについての評価に議論が集中した。

すなわち、2人の会議員から、母親が働いていたということが自分にもよい影響を与えているという評価がなされ、女性の生き方として結婚がすべてではないという意見や、働きながら母親の役目を果たすということは難しい、子供が病気になったときなど、仕事を捨てようかと思ったが、与えられた中で精一杯、人間として生きたいということで現在までがんばってきた、この一生懸命生きているという母親の姿は子供にとっても必要ではないかという経験、また、子供を育てることに専念してきたが、子供が大きくなったとき淋しい、働きつづけられる環境であればつづけるべきであろうという感想などが出された。

一方、子供に貧乏させるよりより豊かにということで保育所にあずけて安易に働く母親がいるが、この機会に考えてほしいという意見もだされたが、働く母親からは、母親たちは多かれ少なかれ生活のために苦しくても働いていると思うという反論もなされた。

さらに、自分を育てるという観点から、育児などで仕事を中断することのないようにしたいという意見や、育児などで中断されその技術が生かされなくなった時でも別な技術を身につけて働きつづけたという経験が出される中から、仕事を続けていく上での保育所の必要性や育児休職制度がほしいという声もあげられた。農村の主婦からは、自分たち農村婦人の遅れを認識する中から協力しあって保育所をつくったという経験が語られ、そういう意味で、20代～30代の一番意欲がありながら育児のために集会などに参加できない人たちのためにも保育所が必要であり、まだまだ社会教育に行政的力量がおかれていないという指摘もなされたが、それを単に行政にまかせるだけではなく、自分たちももっとボランティア活動をすすめる必要があるのではないかという方向が出された。

第3分科会

人間関係の問題を中心として

リーダー 人 見 康 子
司 会 田 代 広 和
(帯広市広報課長)
記 録 布 田 敦 子

第3分科会は、女性会議員13名と男性の特別会議員4名で構成された。年齢は20代、50代の男性会議員2人を除き、30代、40代で占められた。主婦専業は6名で他は教員、公務員、農業など、男子は自営業、医師、公務員、団体役員である。

I 家庭における人間関係

家庭における人間関係として、初めに親と子の問題が出された。母であり教員である会議員からは、転勤することになったところ、小学校6年生の男の子が、親とわかれても友だちと離れたがらないで困ったという話が出され、それをめぐって子供の立場と親の立場、子供の友情や思いやり、親の教育などについて話が展開され、結局、子供には子供なりの考えがあるが、親の立場としてけじめをつける必要のある時は、子供とよく話し合い理解させる以外にないという結論が出された。

つぎに、子供のしつけや教育に関連して、「女は女らしく」育てられるということや女性の役割論をめぐって活発な意見が交わされた。

女性会議員から「女性らしく」と育てられたが、職場や家庭で女性らしくお茶を汲んだり夫や子供の世話をするのは、共働きなど、女性が社会的に活動をしていくとき、過重負担になってきている、「女性らしさ」からの解放が必要なのではないかという意見が出された。これに対して男性会議員からは、お茶を入れたり掃除をしたりするのは女性の役割であり喜びではないのかとの意見も出され、その中からお茶は自分が飲みたいから相手も飲みたいだろうというように進んでやるようにしたら負担にならないのではないかという意見や、スエーデンやオーストラリヤで

も男性が家事をするという現状や、家族が母親を除いて全部男性という議員からは、小学校4～5年生のときから子供のしつけとして炊事をさせるようにした、子供が大きくなって結婚し共働きをしているがお嫁さんから親のしつけがよかったと喜ばれているなどの事例も出され、「らしさ」とは男あるいは女としての責任と使命感から出てくるのではないかなどの意見も出された。

また、婦人の役割は何かということに関して、婦人にノイローゼが多いのは、男性の理解がないからではないかという疑問に対して、医師である特別会議員からは、女性が男性に頼りすぎるために、又欧米のように家族が夫婦という横の関係よりも親子という縦の関係が強いために女性は子育てが終り独りになったときにノイローゼになる率が多い、本当の女性の役割は何か問い正したいという発言もなされた。

リーダーからは「らしさ」は本物ではない場合に使われる言葉ではないか。男女の差はわずかなが、このわずかの差が大切な点であり、人間の社会的役割分担の中で女性だけが不利な役割を与えられてきた。社会的役割は人間全体にかかっているの、男も女もそれぞれ人が、自分の意志で自分の才能に合った生き方を自由に選択できる社会が今後あるべきなのではないか」との助言がなされた。

ついで、思いやりのある人間関係とはという問題が出され、差別をしない教育や思いやりのある教育をという観点から発言がなされたが、年老いた親をいたわるとか家族の中での弱い人を助けるなど思いやりは日常の家庭生活の中で自然に芽ばえてくるものであるから、あまり難しく考える必要はないという意見が数人から出された。又その中で、とにかく今の若い人はとよくいわれるが、親の方も子供の育て方に欠陥はなかったのかという反省も出され、若い男性議員からは、わが家ではありがたうを日常的に励行している、子供が大きくなった時、感謝の気持をもつよう育てたいという抱負が語られた。そしてそれら家庭の人間関係の中での思いやりが、ひいては社会的な思いやりにもつながっていくのではないかという方向が出された。その他思いやり論として、欧米と比較して日本では宗教心が薄いのが思いやりということにも影響しているのではという発言もなされた。

Ⅱ 地域社会の中の人間関係

公德心が失われている現状が出された。たばこの吸いがらをどこへでも捨てる、公共施設の利用の仕方、団地に住む人々の無関心とエゴイズムなど、とにかく自分さえよければという状況がみられる中で、誰でも思いやりのある人間関係の必要性を認めながらどうして思いやりが欠如しているのか、また、自分の家族や知人に対しては思いやりが深い、自分に係りのない人に対しては思いやりがないのはなぜか。貧しい時代には連帯感があったが、便利になったら隣近所への思

いやりがなくなった、社会状況の変化が思いやりの持てない時代になってきたのではないか、などの疑問や問題提起がなされた。

その原因として、核家族になり若い年寄りが一緒に暮らさなくなったことや、鍵一つで他人に干渉されない団地やアパート生活がふえるなどの生活環境の変化や子供も受験競争の中で他人のことはかまっていられないという状況が生れており、その成長期に思いやりを醸成する機会がきわめて少いことが指摘された。また、農村など土着の人が多い地域では、他から転居してきた人や嫁はいつまでたっても「よそ者」という扱いがあるという発言があり、そのような状況を打破するために、自分の方から地域社会に積極的に入っていくという努力や農村婦人の中に団地婦人も入ってもらい子供を通して話し合いを進めているという報告がなされた。

しかしその反面、農村地域などでは火事や葬式などいざ困った時などはお互に助けあう生活習慣が比較的多く残っているということも出され、そこから、人の苦しみを自分の苦しみとして受けとめる心とすぐ助けあえる心の準備の必要さを訴える発言もなされた。

さらには、障害者や里子をもつ家庭、不幸な人々へのあたたかい理解をどう深めるかという発言や、人間として生きていく上での思いやりはエチケットであるという発言などもあった。

また、女性とはかく家庭内での母性だけに終わってしまうことが多く、そこからエゴになりやすい、社会の子供としてすべての子供に愛情をもつなど母性を社会的視野にまで広げることが大切ではないかという発言がなされ、リーダーからは、この会議での発言の傾向にもふれて「女性の発言とはかく個人的であり、男性は社会の仕組みを考えた発言が多い。人間は広い視野から物を視るという訓練が必要である。そうでないと今日のように急激に変化している社会の中で、その変動にうまく対応できなくなるのではないか」という助言がなされた。

Ⅲ 国際社会の中の人間関係

アジアの留学生に対して日本人が差別待遇をしたために、本国に帰ってから排日感情をもやしている例を放送してみたという発言から外国人に対する接し方や交流の場などについて意見が出された。

すなわち、アジアから沢山の人を招いたからには国として徹底して面倒をみる必要があり、日本はこの点まだまだ十分とはいえないとの指摘がなされた。そして、日本人は島国という関係上外国人に対して劣等感があり自信喪失をもちやすいので、もっと民間の交流とそこから人間としての心のふれあいをつくっていく必要があるという意見も出された。したがってこれからは若者がもっとフランクに国際的視野に接する機会を沢山与える必要があることや、又現場の教師からはスウェーデンからきた児童を教えて相手からそのよさを学びとったという経験や中国人に仕事を

手伝ってもらった経験の中から外国人もその接し方によって良くも悪くもなるのではないかと感想が述べられた。

最後にリーダーは「地域や社会の人間関係はギブアンドテイクの関係としてとらえ、人間は自分の思いやりを他人にあげると同時に他人からもいただくという関係で成り立っている。自分の意識によって自分をひろげることができるのだから、人間は多面的な顔をもたねばならない、そのことが心の成長にも繋がるのではないか」と結んだ。

第4分科会

自由時間の問題を中心として

リーダー 大久保 貞 義

司 会 清 水 要 子

(ガールスカウト日本連盟)
北海道支部事務局長

記 録 藤 田 栄

第4回分科会は、17名のうち40代の会議員が10名を占めた。有職者は公務員、看護婦、保母、家庭教師、ホームヘルパー、農業など9名である。

I 余暇とはなにか。婦人たちの自由時間は本当にふえているだろうか。

社会的に自由時間が増大しているとみられる今日、婦人たちの自由時間も本当にふえているのだろうかという観点から、参加者たちの実態が出された。農村では若者が流出して主婦による兼業農家がふえ、昼間の集りなどできなくなった、みんな仕事に疲れはてており、自由時間があるてもからだをのばして休みたいというのが実態であり、自由時間の増大などとても考えられないという発言や、都市の主婦も含めて婦人は相変らず生活に追われている者が多いのではないかという実感が出された。20才の会議員からは家事労働と仕事のみになづさわっているというのが母の姿であり、そこには余暇というものはないと母のイメージを帯り、そういう姿で女性の地位向上がなされてきたのではないかと感想を述べた。

それらの体験や実感をとおして余暇とは何かについて話が進められた。

余暇とは自分で創るものであり、収入の時間が物の分野であるのに対して、余暇は心の分野であるとか、勤務外の時間を余暇と考える。あるいは余暇とは生きがいではないかなどの意見が出された。リーダーからは「余暇とは仕事があってその中で生じるもの。農業社会では、労働・家庭・レジャーすべてが同一地点で行われたが、高工業化社会では労働・家庭・レジャーが分離する。そこでは労働密度が高くなるので週休二日制でなければ次の労働が持続できず必然的に余暇がふえてくる。週休二日制、三日制は、機械では生産できない高い能力を身につけるための学習の時間としても必要になってくる。婦人も社会のメカニズムがどういう方向に動いているかをみきわめ、その価値感の変化に対応できる人間になる必要がある」ことが強調された。

共働きの会議員からは、うるおいは余暇の中で見だしやすいし、職業のための勉強の時間と

しても週休二日制の必要性を感じているという発言も出された。

さらにその余暇をどのようにつくっていくかという点については、それは個々人によって異なり、又地域によって異なるとの発言にとどめられた。

Ⅱ 余暇をどう使うか — 特にボランティア活動を中心にして

余暇の必要性や必然性から一歩進んで余暇をどう使うかという事に討論が移った。まず、余暇の活用をボランティア活動に使うという発言が多く出されて話がそこにしぼられた。

ぶどう造りの合間に生きがいとして録音奉仕をやっている。ボランティアといってもおしうりでは喜ばれない。老人ホームに行ったら物を贈るよりも話し相手として喜ばれた。1人ぐらしの老人はホームヘルパーが行くのを待ちこがれている等々、実際にボランティア活動を行っている人々からの発言が続いた。スモン病で足がだめになったが、残っている声で目で手でスモン人形を造り、それさえない人に奉仕しているという感動的な話、長期療養の子供の学習を2年間夫婦でみてやってきたが、その間7名も訪問教師の広援があった。重症身障児施設を婦人会で手伝っていたが予算がつき、みんなでボランティア会館を建てた。お母さんたちがみんなで手をつなぎ、100円ずつためて1,000万にし、精薄児の授産所をつくったなど、多数の実例が出された。

また、ボランティア活動をしたくても幼児をかかえ、生活に追われるなどしてできないという人、これから福祉問題を学習しながら行動する人間になりたいという人など、会場からも数々の発言があった。さらには、福祉は国がやればよいと思ったこともあるが、実際にいま隣で苦しんでいる人がいたら手をかさずにはいられない、それがひいては制度化にもつながるのではないかという発言もあって、討論は、そのためにも自分たちの持っている選挙権を生かし本当に福祉を実現してくれる人を選ぼう。自分の子供を愛するなら、その子供の生きる社会の矛盾を克服するために学習し、選挙権を行使したいという発言や、現在のホームヘルパー制度をもっと充実させ、職業人としての養成と資格を与えてほしいという要望も出される中から、福祉行政がまだまだ遅れていることも指摘された。

Ⅲ なぜボランティア活動をするか — 特に婦人の生き方に関連して

若い議員から女性が余暇を持ちにくいという現状をとおして、これからの女性のあり方、女性の解放という事を勉強していきたいという発言があった。職場では臨時、パートなど不当に安く使われたり、結婚退職させられるという女性の地位の低さ、女性にまかせられた育児・家事労働の重さ、それとともに女性自身の意識の低さなどに腹の立つ思いであることが述べられた。一方、精薄児施設の保母である議員からは、8年間奉仕を続けてくれている女子大生が知恵は遅

れていても、その子らも人間にかわりない事を奉仕をつうじて学びとっていく、こういう若者を信じたいという発言がなされた。

また、ボランティアは暇な人や経済的余裕のある人や近所がやるからというお付き合いでやるのではなく、誰でも孤独になり、老人痴呆症になり、身障者になり、子供が病気になるという危険をかかえている。ボランティアはその中にいる自分自身のためにやるという大かたの方向が出された。さらに子供が家を出たら社会の協力で育てているという認識から、社会の一員として婦人が協力しあい、地域をよくしようという発言もあった。

自分の生活がきちんとできなければ人の面倒はみられない、自分の老後をどうするのかという視点で動き出した時に、その活動が自分の生きがいにもなり、同時に人のためにもなるのではないかという発言や、自分にとって充実する時間をみつめる中から社会の一員として活動する時間をもつ事を考えたいという発言など、自分と社会のかかわりをじっくりみつめて歩こうという発言が出された。

リーダーからは、「ヨーロッパの婦人は自我意識が強くはっきり自分をもっているが、日本の婦人は人生をどう生きるかをあまり考えないのではないか。また、自分の子供もヒューマンな人間として育てているか、自分の子供は人間として社会の中でどう生きるかを考えることができるだろうか」という問いかけがなされた。

Ⅳ これからの教育と学校における週休二日制

子供を生み育てるものとして、これからの教育のあり方や次代の生き方を考えようという事になった。

「学校は学問体系を教えるところであり、特に現在の学歴社会では遊びや情緒を教えない。家庭は情緒や生き方、ヒューマニズム、社会的意識などを教えるところである。しかし日本はまだまだ権利意識や市民意識がうすい。社会的意識の中でどうボランティアを進めるかを考えてほしい、ボランティアが同情からなりたち福祉が恵みである間は本物の福祉とはいえない。社会福祉が地域によって異なるのもおかしい。ハンディキャップをもつ人のために法律や制度として確立させる必要がある。しかし、現在の企業社会は残酷な社会になると予想されている中で、ヒューマニズム豊かな社会を次代は歓迎するだろうか」とリーダーから問題提起がなされた。

そこから今の教育のあり方や問題点、学校の週休二日制などについて意見が出された。

会場からは、我が子は社会に貢献できる教育をしたと自信をもっていえるという発言もあったが、今の子供の教育環境はテストテストで、その中で人間性を育てる余裕はない、子供たちはただ1回のテストで選別され、寝てもさめてもただ参考書を暗記するだけ、これではまるで機械だ

という発言もなされた。そこから学校が社会的意義あるところとして、子供たちが希望をもって過すことができないものかという意見が出されたが、討論が深められるに至らなかった。

☆ 特 別 講 演

「生きることの意味」

画 家 岡 本 太 郎

今日の私の講演の題は、「生きることの意味」ということになっております。これは大変な問題で、深くて広く、話し出したら晩までしゃべらなければいけないことになります。そこで、皆さんがいままで分科会やパネルディスカッションの中で、日本を考えると、物と心とか、その他のいろいろ話しあわれたと思いますので、できれば何か質問を出していただいて、ここで私一人でしゃべるよりも皆さんがいま関心のおもちのことで出していただいて、それをきっかけに問題を展開していけたらいいのではないかと思います。そうすると昨日今日皆さんがおやりになったディスカッションに、私の立場で別な角度から問題提起ができるのではないかと、そう思います。どなたか最も情熱のある人から質問していただきたいと思いますがいかがですか。

（質問） 先日、北海道新聞に先生のお言葉として、「ぼくは生きるというとき、生活をするときに、安易な道と苦しい道がある場合、必ず苦しいほうをとっていままで生きてきた」というような文章が載っていました。私たちは普通考えますと、苦しいことより楽なほうを求めたい気持のほうが多いと思います。その点をもう少し詳しくお聞かせ願いたいと思います。

それは「生きることの意味」のまさに核心にふれるご質問です。ぼくは本当にそう思うのです。マイナスに賭けるということ、これは私の買ってきた信念です。

人間はいつでも、あれかこれかの選択に迫られている。人生の十字路なんて言いますけれども、あれは文学的な形容であって、道は二つしかないんです。本当の道か、妥協する道か。どちらを選ばなければならぬ。身近な例で言いますと、朝目をさまして寝床の中で考える。思いきって起きてしまおうか、もう少し寝ていようか。朝飯をつくる。今日はコーヒーにしようか、味噌汁にしようか。町に出る。バスに乗ろうか、電車にしようか。というようなつまらないことから、向うから会社の上役が来たけれどどのくらい顔を下げようか、それとも知らん顔して行つてしまおうか。お隣りの奥さんに対してどんな態度をとるべきかなど。あらゆることを瞬間瞬に選択する。その場合に、人は誰でも本能的に、自分にとって安全な方を選ぶんです。こうしては危いな、ではこっちにしよう。自分の本当にやりたいこと、言いたいことは抑えてしまって、間違いのない、無事をルートの方に進んでしまふ。そうすると安全ではありますけれども、ちっとも面白くない。生命が輝かないわけです。

しかし、どちらが本当に自分のやるべき、またやりたいことなのか、これがなかなかわからないんですね。人間の根性というのは駄目なもので、危険にとび込むのはいやなものだから、何とかかんと

か理屈をつけて、安全な方に逃げたがる。だから理屈で考えて、こっちの方がいい、行くべき道だな
んていうのは、あんまりあてになりません。

ぼくのメソッドは、ちょっと乱暴に聞えるかもしれませんが、こうやったら駄目だ、マイナスだと思
ったらそっちの方に賭ける。絶対に得をする方には行かないということです。

実は私はそれを生れながらに持っていたんですが、はっきりと自覚したのは25のときです。それ
までは非常に悩んだわけです。しょっちゅうぐらぐらして自信が持てない。

だからあるとき、よし、これからオレは絶対にマイナスの方にとび込もう、と決心したんです。そ
うしたらバアッとひらけてきた。生きるということの意味がはっきりとつかみとれるようになった。
それ以来、断乎としてそれを実行しているんです。

私は小学校の1年生で4つ学校を変えたんです。1年生を2度やったので、小学校を7年間行きてま
した。できが悪かったから落第したのではないんです。全部、先生との戦いですよ。小学校の先生と
いうと、その時分は神様の次にえらい存在だったから、こっちはまともにおつかろうとした。その先
生の言うこと、目つき、問題の出しかた、態度、すべてごまかしたり申しとぼくは絶対許せなかつ
た。それで1人で戦った。なぜかということ、ほかの子はちゃんとごまかして先生に調子をあわせてい
るからです。

皆さんは、子供というものは無邪気で純粋なものと思っていられるかもしれませんが、全く嘘です
よ。5つ6つあたりからもうおとなになっていく。小学校1年という7つぐらいですね。その頃
になると、もうほとんど腐ったおとなになっている。腐ったというほどでなくても腐りかけているわ
けです。先生がごまかしていることをちゃんと見抜いていながら、それに乗ってやって、平気で調子
を合わせているわけです。

子供というのは、お父さんお母さんの細かい気持をちゃんと知っているんです。お母さんににっこ
り笑って調子をあわせていれば、おやつをくれたりおこづかいをくれたりするけれども、お母さんが
にっこりしてもこっちは知らん顔していれば、おこづかいをくれないかもしれない。そんなことはほ
かにもいっぱいありますよ。おとなよりずっとちゃっかりしていて、子供のほうがおとな以上におと
なです。だから先生をちゃんとごまかしている。それで一人で戦って、まず青南小学校というところ
に入ったのですが、一学期で退めて日新小学校というのに移って、そこでも駄目で、十思小学校とい
うのに入って、そこでも先生と戦って、ついに退めてしまったんです。4つ目に慶応の幼稚舎に改め
て1年生として入りなおしたのですけれども、そのときの先生がとても純粋な先生だったので、ぼく
は協力することにした。ところが、ぼくが小学校3年のときですが、校長先生が変わったんです。その
先生は純粋だったためにその校長さんと衝突して、その先生も首になってしまった。それ以来、ぼく
の学校生活はまったくの暗黒で、絶望的だった。それにしても、子供のちゃっかりしていることとい

ったら驚くべきものですよ。

ほくが腹立たしいのは成人式っていうやつです。20才になると成人式だという。さっき腐りかかったと言いましたけれど、20になつたらほんとに腐りきってしまったおとなでどうにもならないですよ。それが何が成人式だ。

かつての原始的な社会においては、大体7つ8つから11~12才までに成人式が行なわれた。そのときおとなになるための、ほんとの人間になるための強烈な試練を受けるわけです。それでその時点から一人前のおとなになって、母親と離れてしまうわけです。

7つ8つというのは非常に正しい。それまでは幼児ですから、何でもめんどりをみてくれる。そのときは自分と宇宙は同体であるわけです。だから、自分が悲しいときは、おてんとう様も犬っころも郵便箱もみんな泣いているように見える。やがて自分が泣いているときに、悲しいのは自分だけであって、みんな悲しんでいない、この世界の中で自分はこれっぽっちの存在だということを意識し始める。人間的悲劇は実はその時点から始まるわけです。

人間というのは、7つぐらいいになると大体そういうことがわかってくる。つまり、自と他、自分と社会ですね。相対的価値観で己れを捉えるようになる。それがはっきりわかってくるのは11~12才のころで、もの心がつくというのはそういうことなのです。そのときにおとなが協力して、人間として生きることのきびしさ、凄さ、その意味を強烈につかまえさせる。それが成人式なんです。

現代社会で更にいけないのは、教育システムです。学校というのは実にけしからんところですよ。順位をつける、お前はだめな子だ、頭が悪いと先生から指摘をされる。片一方で、先生の言うことをうまく繰返して言えるやつが優等生になる。こんな馬鹿なことはありませんよ。だから日本人には勉強ということがわからない。日本人にとって勉強とは何かというと、試験勉強なんです。試験勉強とは何かというと、あれは本当の勉強ではなくて、記憶力ですよ。先生の言ったこと、本に書いてあることをそのまま覚えていて、それをそのまま繰返して答案用紙に書く、それが勉強だと思っているわけです。本当の勉強とは何かというと、そういうものを吸収して、自分の心を通し、自分の血と肉と骨を通して外に出す。そのときには全く違った形になるわけです。つまり、ものを習ったり、覚えたり、読んだりしたものを、その根源を忘れてしまって、それを自分の骨肉を通して全然違ったものとして出すときに、そこに本当の勉強があるわけです。しかし、それでは今の試験は通らないでしょう。そういう本当の人間的な勉強をしようとしたら、劣等生としてみなされてしまう。大学にも行けないし、立派な会社にも入れない。だから、いま社会で大きな顔をしている人は、みんなこの繰返し、コピーのうまい優等生なんです。

随分前のことですが、ある雑誌が面白い調査をやっていました。日本、フランス、イギリス、アメ

リカの会社の社長、重役クラスが、一体夜は何をしているかということを調べた統計が出ていたのです。

日本のそういう人たちは、夜は必ず接待で酒を飲んで宴会だとかつき合いをやっている。フランスでは、自分の家で飯を食って、自分の好きな本を読んで寝る。その本は、大抵哲学書が多いんです。つまり、自分のやりたい勉強をしているわけです。自分が本当に考えて、自分とは何か、心とは何か、物とは何か、生きるとは何かを考えるのが哲学ですからね。

ところが日本の教育システムでは、あまりにも試験勉強、試験勉強というので、ただ記憶力だけで、本当の人間的な勉強をしていない。幼稚園から小学校、中学校、高校、大学まで、それをずうっとやらされているので、勉強というものをやる気が全くなくなってしまいますね。だから、学校を出たらもう二度と振向きもしたくない。だから、会社に入ると一切勉強しない。みんなベチンコをやるか、マージャンをやるか、バーに行って飲むかで、勉強しているおとななんてほとんど見ないですよ。

それからまた専門家の学者になると、専門の学問ばかりやっている。何とか大学の教授が、「私は専門が違いますから芸術はわかりません」という。そんな学問というのはいらないですよ。物と心というのは一体です。私は専門じゃないから芸術はわかりませんなんて言うような人に、本当の学問なんてありませんよ。

芸術の領域だってそうです。日本には、いわゆる絵描きはたくさんいますけれど、芸術家は一人もいないといたいくらいです。みんな商品をつくらせて食っているんですよ。ぼくがすでに20何年前に書いた「今日の芸術」という本の中で、芸術の3つの原則として、「きれいであってはならない」「うまくあってはならない」「こころよくあってはならない」ということをいっています。芸術はわからないというのが、わからないのがあたりまえなんです。わかったら芸術ではない。わからないということは、わからないのではなくてわかったことです。非常に難しいですけど。あらいいわね、なんて言うのは本当にわかっていない証拠ですよ。絵描きなんていうのも、みんなその時代に合わせて、売れることを考えて好かれるような絵ばかり描いている。自分の心や骨肉を通してはいないんです。だから商品になる。資本主義社会においては、商品にならなければ絵描きになれないわけですよ。だから絵描きとはいうが芸術家とはいえないのです。

ソ連の芸術家が私のところによく訪ねてくるのですが、そのたびに言います。資本主義社会においては、芸術はコマーシャリズムに従属している。だから芸術ではなくて商品だ。一方、社会主義社会では、芸術は政治に従属している。どちらも芸術ではないと。

実際、資本主義社会においては、芸術は難しい。ぼくみたいに村八分をくって平気でいるような、

つまり、絶対に好かれない、売らない、売れない、絶対にきれいなものはつくらないのは別として。そのほくでさえ、絵を描きながらしょっちゅう自分自身と闘っているんです。ちょっとでもそれが絵になりそうになると、それをぶちこわしてしまふ。芸術は絶対にきれいであってはいけない。美しいとはぼくは言ってないんですよ。美しいということは絶対なのだから。醜悪美という言葉があるとおり、醜悪なものも美しいのですからね。絶対というものに言葉は使えないわけです。

きれいというのは相対的なものだ。あの人は美人だというのは、実は言葉が間違っているんです。きれいな人だというべきですね。それは、その時代の基準に合っているからきれいなんですよ。高松塚の古墳からその時代の美女の絵が出てきたけれど、それにそっくりな女性がいま道を歩いていても、誰も振り返りはしないですよ。笑う人はいるかも知れないけれど、盛んにいま髪の毛の色を変えて金髪にして、ちょっと見るとどこの国の人かなと思うような人がいます。よく見ると日本人だった。昔は、赤毛というのが一番恥ずかしいことだったので、毛が赤いと一生懸命真黒くぬったわけです。それがいまはわざと赤くする。

つまり、そういうように、きれいということは相対的なものだから、その時代によってどんどん変わってきてしまふ。そんなものは絶対なものではない。芸術というのは、永遠に変らないものなんです。

ぼくは、先ほどちょっと縄文土器の話をしていたんですが、縄文土器というのは、私がいまから20数年前に、あれこそ美しい、日本のすばらしい美であると発言するまでは、誰もあれを美しいとは言わなかった。私が縄文文化の発見者ということになっている。勿論、発掘はされていきましたよ。考古学の資料として研究はされていた。しかし、日本の美術史の中には入っていなかったんです。日本の美というのは弥生から始っていた。私が発言してからだんだん共感する人がふえてきて、いまは弥生よりも縄文の方がはるかに強烈に美術史の中で扱われている。つまり伝統は現在であるということがそこで立証されているわけです。

ぼくは、過去なんてないといつも思っているんですけど、未来もないんですよ。あるのは現在だけです。この現時点において決意する以外に、本当の生き方はないわけです。ぼくが非常に嫌いなのは、いずれ何とかしますという言葉で、いずれというのは、あれはインチキですよ。現在そうでないものは、いずれ絶対にそうなりっこない。縄文土器なんて全然問題にされなかったのが、ぼくが言うってから急に浮び上がったということは、現在が過去を現在化したわけです。だから、みなさんがみなさんのいま生きているこの瞬間瞬間に、生きている情熱で、それが何億年前でも何千年前でもいいし、いま現実に実現していなくても、夢でもいいからそれを決意する。そうして現在が生きていることによって、未来と過去というものがもうその現在の中に凝縮される。これが人間ですよ。

今日は婦人会議ですから、女の人の生き方について特に申し上げたのですが、大分前に、私はNHKの「とんちには奥さん」で、主婦と生きがいというテーマで、奥さんたちと話し合ったことがあります。テーマを聞いたとたん申しわけないのですが、ヒョイとだるまさんのイメージが浮かんでしまったんです。それで、主婦に生きがいなんてそんなものはありっこない、それはダルマさんにマラソンしろ、というのと同じことだと言って、女性群からわいわい反対論を受けたけれども、そうなのですよ、みんな2DKから3DKに住んで、我が家、我が息子、我がテレビ、マイカーなどといって、自分のちっ

ぼけなところで国境をつくって、世間の目を気にしている。そんな卑しい人たちに生きがいなんてありっこないです。自分の子は大事にして、よその子はよその子。そんなの汚ないですよ。ぼくは子供をつくらなくても、ぼく自身がぼくの坊やであり、ぼく自身がぼくのお父ちゃんである。

男と女の関係もそうですよ。男女関係というのは、恋愛であり、セックスの問題だと思っているのは大間違いで、ほんとうの男と女の存在は、それがお母さんと坊やの関係でもいいし、隣のおばさんとの関係でもいい。

この世界というのは、男の目で見返した世界と女の目で見返した世界と違うわけです。目は2つ、2組ある。だからそれを生かして男と女がほんとうに問題をぶつつけ合うことによって、世界が現出するんです。それを、男女関係というものを、セックスだと限定してしまい。その貧しさ。

しかも夫婦となると私有財産制でしょう。がっちりとお互に所有関係を主張して、そしてセックスというシステムの上に、小市民社会というものができて、生活ができていく。小市民というのは、小さなエゴのかたまりですよ。お隣りと壁で仕切られてしまっていることで、その精神までが2DK程度に固ってしまつて、我が子、我が娘というものだけを大事にして、隣の息子なんてどうでもいいという精神。そうではないんだ。

ぼくは、結婚式なんて大嫌いだけれども、しょうがなくて出るときもあって、そういうときに言うのだけれど、この時点において、新郎は世界中の女性の亭主になったつもりになれと、新婦は世界中の男性の女房になったつもりになってほしいと。現実的には、それは無理ですよ。けれども、そういう精神をもたなければいけないんですよ。ところが誰もそうならないですね。マイホーム。そのうち子供ができる。そうすると小さいお城ができる。テレビがある。マイカーがある。それで恥ずかしいものはよそに見せないで隠す。ちょっと隣りより立派だと得意になる。主婦のそういうところが卑しいんですよ。それですぐ教育ママになってしまう。

なぜ教育ママになるか。その理由の1つとして、まず、女性は誰でも若いときには夢を見るわけです。おとき話とか童話を読む。そうすると、すばらしいプリンス、岡本太郎のようなすばらしいプリンスがあらわれて、たいへんな困難があったときにさっと救ってくれる。そしてすばらしい恋をして、やがて宮殿にいて結婚式をあげる。などとそういう話を読んで、若いプリンスが何かを夢見ている。そのうちだんだん大きくなってくると、そんなのは嘘であって、ただの夢だということがわかってくる。そうすると今度は、テレビなどでなかなかサッソーとした男性が出てきたりすると、そういう男性にあこがれる。そういう男性はいないですよ。現実にはいないからお芝居でごまかしている。したがって、周囲を見廻しても、待てど暮らせどそういう理想的な男性は出てこない。

テレビなどで、ぼくが本当に腹がたつのは、刀を抜いて、悪代官か何かをバッサバッサと切捨てる。そうしてさっと刀を収めて、粋な三度笠かなんかをかぶってどこえともなく立ち去ってしまう。無条件で階級の上の、悪いやつをバッサとやる。しかし、今の世の中にそんな者がどこにいますか。ご亭主の中で上役に対して、何だあんた間違っている、などといって抗議するやつはいないですよ。文句つけるどころか、上役がくるとべこべこしているんだから悲しいですよ。だから初めは男性的男性と一緒にあったつもりでいても、半年でがっかりする。ひどいのは半日から1日で、何でこんな男と一緒にってしまったのかと思う人もいる。

亭主だって、女房には新婚当時はちょっと惚れて時間通り帰ってくるけれども、しばらくするとよそで飲んで帰ってきて、ドアをあけてやっても亭主は顔も見えてくれない。そうになると女性は、今度は息子のほうに情熱をかけるわけです。子供ってかわいいですよ。存在としてすばらしいですよ。だから今度はこの子にこそ、自分が亭主に失望したものを恢復しようと思うんです。卑しいことに、それをそのまますばらしく育てないで逆に教育ママになってしまう。どうしても功利的になるんですね。

ということは、幼稚園からいい小学校に行き、そこからいい中学校に行き、いい高校に行く。いい高校を出ていい大学に入らないと社会的にばかにされるし、いい会社にも入れない。だから、こういう社会的なものを意識して教育ママになってしまう。そうすると、本当の意味で生きている人間ではなくて、みんなごまかしごまかし生きて行く方向へ、子供の尻を引っぱたくのです。そうすると、育てられた様うもごまかされて駄目になってしまう。

話がとんでもない方向へいってしまいましたが、ぼくの言いたいことは、そういうような生き方をしている若者は本当にかわいそうだ。結局、どうして自分は生きるのかという勉強も何もしないで、ただシステムの中で自分をなくしてしまっている。つまり記憶力だけで、先生の言ったこと、人の言ったこと、参照書に書いてあることだけを覚えて、自分を捨ててしまった存在というのは実にむなししいですよ。それが、今日の絶対的なむなしさの大きな原因であるわけです。

ところでそんな中でも、人間というのはどうしておれはこの世の中に出てきたのだらうという疑問がいつでもあるわけです。そして、若者はみんなある純粋さを持っている。ごまかしたり、適当に妥協してても、どうしても許されないというものが心の中にあるわけです。

しかし、社会的な条件ができるまでは、どんなに本当の事を言っても世間が相手にしてくれない。ぼくが実に辛かったのは24〜5才ぐらいのときだけれど、それは実に失望していましたよ。

ぼくは子供のときから、お父さんお母さんといつでも議論をして、ぼくがいつでも勝っていました。父母はムード派だったけれど、ぼくは非常に論理的でしたから。

小学校3年生のとき、いなかに行つてある旧家に泊ったんです。翌日ぼくが朝飯を食いにいくと、

その家の人たちがみんなぼくの顔を見て笑うんですよ。「もちろん」「もちろん」「もちろんさんが来た」という。どうしてかという、その前の晩食後にぼくとぼくの両親とが議論したわけです。ぼくはほんの小さい子供だったけれども、腕を組んで、向うが本当に筋が通っているときは、「もちろん」とうなづいて、納得できないとばっとはね返したわけです。その項は、両親と対等に議論をたたかわす、しかも相手が納得できるときは、もちろんなんて言う子供はいないわけですよ。みんなお父さんやお母さんには、ハイハイとだまって言うことを聞いている。だからいなかの人たちはびっくりしてしまって、ぼくは「もちろんさん」になってしまったのです。だからぼくの両親のよかったのは、あくまでも対等につきあってくれたことで、子供扱いは全然されなかったことです。

そういうように、ぼくは両親にも己れを主張し、先生とも戦い続け、ずっと戦いつづけたけれども、若いとき、まだ社会的に認められない時点で発言しても、誰も聞いてくれない。社会は動かないのですよ。「まだお前は若僧だからお前にはわからない」とか「何だお前、若いくせに生意気なこと言うな」と、本当のことを言うほど相手にされないし、現実のものとして戻ってこない。それが、若さというのは暗いということなのです。青春はすばらしく幸運で、太陽のように輝いているなんて、あれは大嘘ですよ。純粋な青春が一番暗い。一番本当のことをつかんでいながら、若い、経験がない、何だ、と押えられてしまって社会的に通用しない。それで絶望していた。若さというのはそういう絶望感があるわけです。

ところが、大抵の人はおとなになるという段階において諦めてしまう。若さの絶望、純粋さを放棄して、安全な道を通るわけです。そうやって、ごまかしごまかししているうちにそれに馴れてしまう。みんなやっているようにやっていけば間違いはない。なにも自分一人で異をたてることもないんだから。あるいはそんなことも思わないくらい自動的に、するするっとみんなに同調して、どこにでもあるような“おとな”になってしまうのです。これは実に日本的ですね。日本を考えるとときに絶対に基調において考えなければならない。

ぼくは去年か一昨年だったか、インドに行ったんです。すると白い布をかぶってゴロゴロ道に寝ころがっている人がいる。家もないし、無一物なんですね。どんなに惨めかと思ってガイドさんに聞いたら、彼等は平気なんだそうです。なぜならば、この世で自分の運命に殉ずれば、その次に生れ変わるときにはより高い段階になる。それで殉ずればもっと高くなって、ついには宇宙とおのれとが合体するというんです。ブラフマン、これは宇宙です。アートマン、自我、この2つが合体すること。これは深遠な哲学ですよ。実はこれはまた相当インチキなところがあるので、ぼくは言いたいことはあるのですが、その話をするともた何時間かかるかわからないのでやめます。そのとき、あつ、これが哲学だと思ったわけですよ。つまり、輪廻の思想、カルマ、業の思想ですね。

ぼくは、パリ時代に哲学をやっていた。西洋の哲学は論理学である。1 足す 1 は 2 である。1 足す 2 は 3 であるという論理学である。そういう哲学が 1 つの役割を近代文明に与えたことは確かです。しかしこういうインドの民衆がもっているような生死の悟りは西洋哲学では得られない。哲学はインド。つくづくそう思いました。それから中国の孔孟の教えにしても老荘の教えにしても、これは道徳です。

さてそこで、日本には何があるか。日本にはそういうものは何もない。日本にあるのは風俗習慣です。あなたはこれをイエスと思うかと聞くと、日本人はすぐ返事をしないですよ。必ず左右を見てみんなの顔をうかがう。ノーと思うんだけど、みんながイエス、イエスと言っていると、ああイエスですと言う。これが日本人ですよ。1 人だけでみんなと反対の事を言っているのは、ぼくの知っている岡本太郎ぐらいのものです。みんながイエスと言ったってノーと言っている。そのかわりたいへん気の毒な思いをしているらしいのですけれども。

だから思うのですが、日本という国は村なんです。ぼくは日本村といっているのですが、みんながノーといったとき、たとえば自分はイエスでもノーと言っておかないと村八分を食うわけですよ。だから合わせる。それを道徳だと思つて。道徳というのは、逆にみんながノーと言っても自分だけがイエスと言うのが道徳であり、哲学であり論理学ですよ。みんなに合わせて自分をなくしてしまうのが道徳であるがごとき思っているのは不思議なことです。これが日本をいかにむなしくしているか、みなさんがむなしくなっているかということは、みなさんもおわかりになると思う。

これは、芸術的な問題とか、いろいろあるんですよ。みなさんが着る着物でも、本当はこういうのを着たいんだけど、選ぶ前にまずまわりを見まわす。みんなの目を気にしてしまつて、みんなが安心して見てくれるような無難なものを着たり、やったりする。すべてそうです。

1 問だけ答えるのにずいぶん時間がかかってしまいましたが、つまり、自分というものをほんとうに打出せない。これは日本人ばかりではない。ヨーロッパでもアメリカでも、小市民というものは、みんな安全な通をとるのが賢明だと思つて、自分を狭め生きがいを失っている。

そうではなくて危険な道をとる。なぜ危険な道かといえば、それが本当にやるべきことだから危険なのです。本当にやるべきことでないならば、2 つの分れ道になるはずはないんで、やるべきだけでもそれをやるとどんなことになるかわからない、危険だ、では安全な道をとって妥協しよう。そうするとみんなに安心されるし、我が家の親子も全部無事に揃ってそれで結構だということになる。それでみんな安全な道を安全な道をとってしまふから、非常に惰性的に流されていくわけです。それでむなしくなる。

もし危険な道をとったとしたならば、ファイトがわきますよ、ぐっと。生きがいですね。つまり死にがいです。危険な道というのは、この死があるから危険なんで、死以外には危険なものはないんですよ。貧乏になるとか、みんなに悪口を言われるとか、これは全部死を意味してしまうわけです。

非常に低い意味でね。嫌われると食えなくなるんじゃないか。食えなくなると餓死しなければならないとかいうことで、危険な道というのは、必ず死の危険ですよ。だから避けようとする。しかし死の危険のないところに命は燃上らないんです。死というものが目の前にあるからこそ、生命が輝くわけですよ。

だから、人間は生きているときに死というものといつでも対決しながら生きなければならない。そうすると、体中からもりもりと生きる命が燃上るんです。ぼくはだからいつでも危険な道をとつている。危険な道をとると、本当の道だからとんにあらゆるところから危険な条件が出てくる、と同時に生きがいが出てくるのですね。

私は、みなさんには申し訳ないのだけれども、福祉という言葉には反対で、あれは選挙用には結構だろうと思いますが、人間の生き方にとっては果してどうなのか。すばらしく生き、すばらしく死ねばいいんですよ。生きていてよかった、すばらしく死んでよかったというモメントを本当は人間は持っていなければいけないのです。

どうも近頃のヒューマニズムの道徳は、生命尊重はいいんですけども、死というものをただ怖れて、悪いことのように考える。

昔のエスキモーはきびしい生活ですから、年をとると舟を出して自分で海の中に飛び込んで死んでいったということです。そこでどうしても浮んでしまって死ねない人は、一番かわいがっていた孫娘が何かが、おじいちゃん早く行ってらっしゃいよと言って、やさしく頭を水の中につっ込んで手伝ってくれる。日本にも昔の伝説にはそれに近いものがあるわけです。まあなんてかわいそうに、そんな不幸な目にあいたくない、と思いますか。私はそうは思わないんです。

ぼくは幸福という言葉が大きいです。数年前によくはやったでしょう。しあわせなら手をたたこうという歌が。若者が盛んに歌いながらボンボンとやっていたね。あれを見ると、もう本当にけとばしたくなるんです。しあわせというくらい卑しい言葉はありませんよ。現時点において何がしあわせなのか。

例えばみなさんだったら、自分の亭主はちゃんと勤めているし、間違いなく月給をもらって、家なところに使ってしまわないで帰ってくるし、自分の娘や息子は、学校で一応成績優秀である。一家揃って健康で、日がさして暖かくて何となくうっとりしてしまふ。生活の心配もお金の心配も全部ないというときに、みんなは幸福だと思ひわけですよ。これは死から一番遠ざかった状態ですね。そういう時点が幸福だと思ひ。それも自分のところだけで、その数軒先のほうにどんなに苦しんで、どんなに貧乏で、つらいいろいろな問題があろうと、そんなことはおかまいなし。そんなことまで心配したら幸福であり得ないから、我が家だけがうまくいってればそれで幸福だというわけです。だからぼ

くはそんなものけとばしたいんですよ。そんなお城はつくりたくない。だからぼくは、家庭とか家族とかをつくらないように、理想的に生きているわけです。

申し上げますが、そういう根性を持つのはやめたほうがいい。主婦が絶対生きがいを持ってないというのは、そういう意識でやっているからです。

ぼくが幸福というかわりに言いたい言葉は、歓喜という言葉です。燃えるように命が開くことを歓喜という。幸福というのはなるだけ燃やさないことをいう。なるだけひっそりと、おだやかに、安全なのが幸福。歓喜というのはいつ死ぬかわからない、そういうふうに、危険なほうに賭けると本当に生きがいがあって、死ぬとか生きるとか心配なくてすむわけです。物と心とか考える必要ないんです。物即心であり、心即物であり、物と心とがすべて一体である、さっき言ったように。

日本を考えるとときでも、日本を考えるとより、もつと人間そのものの問題を考えるべきですよ。日本なんて、ついこの間できた意識です。日本という言葉は古代からあったのでしょうが漠然としたもので、つまりは、西欧的な影響を受けて国境をつくり一国というのをつくったのはヨーロッパですからね。このヨーロッパの影響を受けて国家というものをつくったわけです。以前は国境なんてなかったんです。すべてが流れていた。日本だけです、流れていなかったのは。島国だから。そこに日本の特徴があるんですが。大陸では、始終異民族が侵入して来て、違った宗教が入って、全部をぶち壊したり殺したりしたけれども、日本という国はそういうカストロフイーはなかった。ずっと安全を保ってきた。日本で一番ドラマがあつたのは、せいぜい平家と源氏ですが、あれだって何ということはない。社長とか専務とかが変わっただけです。日本という会社で天皇という社長はいるけれども、その下の平某という専務が源氏に追い出されて新しい専務に代わったというだけの話です。一般の生活は何ら関係なかった。明治維新だって同じことですからね。

だからということで、これから本当におもしろい話が始まるわけなんですが、時間がきてしまいましたから終わります。どうも失礼しました。

(付)

第 26 回 婦 人 週 間 地 方 行 事

都道府県名	行 事 等 名 称	開 催 日	開 催 地	参 加 人 員
北 海 道	全国婦人会議旧会議員懇談会	49. 1. 18	(札幌市)	20名
青 森	婦 人 問 題 懇 談 会	1. 25	青 森 市	15名
	婦人週間青森県婦人会議	4. 19	"	183名
	全国婦人会議出席者のつどい	4. 20	"	18名
岩 手	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 27	盛 岡 市	15名
	婦人週間岩手婦人会議	4. 19	"	100名
	第3回宮古市婦人会議	4. 21	宮 古 市	100名
	婦 人 週 間 座 談 会	4. 26	陸前高田市	18名
	釜 石 市 婦 人 大 会	5. 26	釜 石 市	300名
宮 城	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 25	仙 台 市	22名
	宮 城 地 方 婦 人 会 議	4. 18	"	230名
秋 田	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 21	秋 田 市	20名
	婦人週間秋田地方婦人会議	4. 18	"	80名
山 形	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 9	山 形 市	17名
	婦人週間山形地方婦人会議	4. 25	村 山 市	220名
福 島	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 28	福 島 市	24名
	婦人週間福島県婦人のつどい	4. 9	"	101名
	いわき地域婦人問題懇談会	4. 26	いわき市	36名
茨 城	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 29	水 戸 市	17名
	婦人週間茨城地方婦人会議	4. 24	"	180名
栃 木	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 15	宇都宮市	19名
	婦人週間栃木県婦人のつどい	4. 25	"	205名
群 馬	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 8	前 橋 市	20名
	婦人週間群馬地方婦人会議	4. 5	桐 生 市	300名
	婦人週間群馬地方婦人会議反省会	4. 26	前 橋 市	15名
埼 玉	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 25	浦 和 市	13名
	婦人週間埼玉婦人会議	4. 5	"	67名

都道府県名	行 事 等 名 称	開 催 日	開 催 地	参 加 人 員
千 葉	婦人週間テーマについての座談会	1. 23	千 葉 市	25名
	協働員事務打合せ(テーマについての講演)	2. 21	"	50名
	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 8	"	12名
	千 葉 地 方 婦 人 会 議	4. 10	"	92名
	全 国 婦 人 会 議 報 告 会	4. 24	"	41名
	協働員事務打合せ(全国婦人会議報告会)	5. 8	"	45名
	全 国 婦 人 会 議 報 告 会	5. 24	松 戸 市	32名
東 京	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 27	千代田区	14名
	婦人週間東京地方婦人会議	4. 22	"	86名
神 奈 川	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 12	横 浜 市	23名
	婦人週間神奈川婦人会議	4. 8	"	200名
新 潟	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 22	新 潟 市	13名
	新 潟 地 方 婦 人 会 議	4. 26	"	70名
富 山	文 化 講 演 会	48. 7. 14	富 山 市	600名
	新緑会例会(所感文応募者のつどい)	49. 1. 30	"	150名
	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 25	"	名
	富 山 県 婦 人 会 議	4. 25	"	140名
	富 山 県 婦 人 の つ ど い	4. 25	"	650名
	富山県婦人のつどい反省懇談会	4. 25	"	名
石 川	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 9	金 沢 市	24名
	石 川 婦 人 会 議	4. 9	"	65名
	所感文応募者懇談会	4. 22	"	35名
	七 尾 地 区 婦 人 会 議	4. 27	七 尾 市	55名
福 井	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 22	福 井 市	15名
	婦人週間福井婦人会議	4. 24	"	150名
山 梨	第 2 回 山 梨 婦 人 会 会	4. 10	甲 府 市	135名
長 野	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 27	長 野 市	22名
	婦 人 問 題 研 究 会	3. 18	"	19名
	婦人週間長野地方婦人会議	3. 29	"	171名
	婦 人 週 間 懇 談 会	4. 24	飯 山 市	21名

都道府県名	行 事 等 名 称	開 催 日	開 催 地	参 加 人 員
	婦人問題懇談会(全国婦人会議出席報告)	5. 8	上 田 市	29名
岐 阜	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 19	岐 阜 市	11名
	婦人週間岐阜地方婦人会議	4. 19	"	130名
静 岡	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 26	浜 松 市	24名
	婦 人 問 題 研 究 会 議	3. 18	静 岡 市	67名
	婦人週間静岡地方婦人会議	4. 1	浜 松 市	190名
愛 知	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 26	名古屋市	45名
	婦人週間愛知地方婦人会議	4. 22	"	200名
三 重	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 6	津 市	14名
	三 重 地 方 婦 人 会 議	4. 23	"	82名
滋 賀	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 25	大 津 市	14名
	"	3. 28	彦 根 市	14名
	働く婦人のつどい	4. 6	甲 賀 市	65名
	滋 賀 地 方 婦 人 会 議	4. 24	彦 根 市	180名
京 都	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 11	京 都 市	26名
	家庭問題・婦人問題相談室	4.10 ~16	"	名
	京 都 婦 人 会 議	4. 25	"	150名
大 阪	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 19	大 阪 市	15名
	婦人週間大阪婦人のつどい	4. 10	"	125名
	婦人週間昭和49年度婦人のつどい	4. 13	"	150名
兵 庫	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 20	神 戸 市	21名
	婦人週間兵庫婦人会議	4. 24	"	150名
奈 良	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 13	奈 良 市	15名
	婦 人 週 間 紙 上 座 談 会	3. 28	"	3名
	婦人週間奈良婦人会議	4. 4	"	190名
	全 国 婦 人 会 議 報 告 会	5. 9	"	30名
和 歌 山	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 15	和歌山市	22名
	全国婦人会議出席者のつどい	3. 24	"	31名
	全 国 婦 人 会 議 報 告 会	5. 23	"	60名

都道府県名	行 事 等 名 称	開 催 日	開 催 地	参加人員
鳥 取	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 2 2	鳥 取 市	2 9 名
	新聞特集「日本を考えるー 婦人週間よせて」	4. 1 1 4. 1 7		7 名
	鳥 取 婦 人 の つ ど い	4. 1 2	倉 吉 市	1 1 7 名
	全国婦人会議出席者のつどい	5. 1 9	鳥 取 市	1 0 名
島 根	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 2 6	松 江 市	1 5 名
	婦人週間島根婦人会議	4. 1 0	"	9 2 名
	全国婦人会議出席者報告会	4. 2 6	"	1 8 名
岡 山	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 2 6	岡 山 市	1 0 名
	婦人週間岡山地方婦人会議	4. 9	"	1 5 0 名
	全国婦人会議出席者報告会	5. 2 4	"	4 5 名
広 島	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 1 4	広 島 市	2 6 名
	広 島 地 方 婦 人 会 議	4. 1 0	"	1 5 0 名
	婦 人 研 修 会	4. 1 6	豊田郡本郷町	2 0 0 名
山 口	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 2 6	山 口 市	2 1 名
	婦人週間山口地方婦人会議	4. 2 3	"	8. 5 名
	山口県における婦人の生活に 関する意識調査	2~3月	県 内	1, 4 0 0 名
徳 島	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 2	徳 島 市	1 2 名
	徳 島 地 方 婦 人 会 議	4. 9	"	1 3 5 名
	全国婦人会議出席者報告会	5. 2 0	"	名
香 川	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 1 3	高 松 市	1 9 名
	婦人週間香川地方婦人会議	4. 5	"	1 2 0 名
	全国婦人会議出席者を囲む座談会	4. 2 4	"	2 8 名
愛 媛	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 1 3	松 山 市	1 8 名
	婦人週間愛媛地方婦人会議	4. 1 0	"	1 5 0 名
高 知	婦 人 問 題 懇 談 会	4. 9	高 知 市	1 4 名
	婦人週間高知地方婦人会議	4. 2 4	"	6 8 名
福 岡	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 5	北 九 州 市	1 6 名
	"	2. 2 7	福 岡 市	1 0 名
	婦人週間福岡婦人会議	4. 4	"	2 3 9 名

都道府県名	行 事 等 名 称	開 催 日	開 催 地	参加人員
佐 賀	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 13	佐 賀 市	16名
	婦人週間物と心をつつめる 佐賀婦人のつどい	4. 5	"	87名
	全国婦人会議出席者報告会	5. 10	"	34名
長 崎	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 28	佐世保市	5名
	"	3. 15	長 崎 市	16名
	婦人週間長崎県婦人のつどい	3. 25	佐世保市	166名
	各種婦人団体第3回婦人の日大会	4. 17	長 崎 市	425名
	全国婦人会議出席者の会	5. 18	"	20名
熊 本	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 13	熊 本 市	20名
	婦人週間熊本地方婦人会議	4. 24	"	170名
大 分	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 20	大 分 市	19名
	座談会「第26回婦人週間について」	4. 9	"	10名
	婦人週間大分地方婦人会議	4. 25	"	406名
	全国婦人会議出席者のつどい	6	"	名
宮 崎	婦 人 問 題 懇 談 会	3. 1	宮 崎 市	29名
	婦人週間宮崎地方婦人会議	4. 6	"	234名
	婦 人 週 間 報 告 会	5. 28	"	13名
鹿 児 島	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 28	鹿児島市	16名
	婦人週間にちなむ名瀬市婦人の つどい大会	4. 23	名 瀬 市	141名
	婦人週間鹿児島婦人会議	4. 27	鹿児島市	70名
沖 縄	婦 人 問 題 懇 談 会	2. 19	那 覇 市	15名
	第2回沖縄地方婦人会議の分科会 (第1)	3. 30	"	26名
	" (第2)	3. 20	コザ市	24名
	" (第3)	3. 13	名護市	32名
	" 全体会	4. 10	那 覇 市	150名
	第 2 回 祝 賀 激 励 会	4. 10	"	240名